

風の子・太陽の子

子どもらよ
このにわにきて
あそべ
うたえ
花のように
鳥のように



ゆりかごを動かす手は、世界を動かす…ペスタロッチ

ふじ 社会福祉法人
み野なかよし保育園



保育園は寝・食・遊・育が安心できる楽園

出産しても自分の今までの能力と経験を生かし、社会に貢献し仕事を続けて働きたい。そして経済的にも豊かになりたいという女性・母親が増えてきています。

しかし、未だ生まれて間もない赤ちゃんを保育園に入園させて働くお母さんには複雑で屈折した思いがあり、それらの思いを背負いながらも入園してくる赤ちゃん達です。

親にとっての第一歩はお子さんを安心して預けられることです。それは入園するお子さんにとっては、遊、育、寝、食が安全、安心した環境の中で「三つ子のたましい」が育まれる日々の保育が理念から実践へといかに確立されているかということでしょう。且つ良い子育てをしたいという親の願い、思いを保育園(保育者)は真摯に受け止め、日々の保育実践の中で為されているか、ということです。

全ての児童は最善の保育を受ける権利を持って生まれてきています。しかし、子供を取り巻く環境は「立てば漫画、座ればTVゲーム、歩く姿は塾通い」というような現実の中、食事一つ取っても中国産のぎょうぎ事件に見られるように本、心を育てる子育てが難しい時代になってきております。一口の食事も身体を育てるに言うに及ばず、こころが育つ最高・最善の物を与えなければなりません。

保育園は子供達にとっては楽園であり天国です。それは、単に一日を空間的・物理的・時間的に安全に預かれば良いということだけであってはならないからです。赤ちゃんは、頭でっぺんから足の爪先までを動かし泣き「ミルクが欲しい」「抱っこ」と懸命に全身でエネルギーに表現するその姿。「彼らの未来に豊かな御祝福あれ！」と、祈りながら日々の保育の中で大切に関わりたく思っております。

☆保育者は、彼らのそのような欲求を受け容れ、彼らの輝かしい未来を祈りながら、全身全霊を持って日々の保育に関わっていくこと願っております。

私は赤ちゃん

人は、愛されるために生まれてくる。
 赤ちゃんは、愛されてヒトから人になる。
 人の赤ちゃんは、動物の中で最も未熟、非力な存在。
 ただ、泣く事と、オッパイを吸うこと。
 生きる命の綱はお母さんのオッパイ。
 お母さんの胸の中で、空腹を満たす。
 だが、お母さんの胸は単にお腹を満たすだけではない。
 そこは、赤ちゃんへの思いが
 いっぱい詰まっている愛のお袋。
 そこからほとぼし出る
 お母さんの愛とブレンドされたオッパイは
 体だけでなく、“信頼”という
 心の原型を育てる最善の滋養、最高グルメ栄養源。
 赤ちゃんは、愛の大食漢。
 お母さんの愛を一身に受けながらグイグイと喉元に飲み込む。

お母さんの優しく見つめている目差し、
 囁き掛ける声に応じるように、
 キャッキョッと笑う声、ウマー、ウー、ウーと
 言葉にならない声で応じる
 その表情、しぐさ、そのすべては愛しい。
 母乳分泌ホルモン「プロラクチン」は
 お母さんの血液を瞬時に母乳汁に変える。
 赤ちゃんは母の血液のオッパイで命を繋ぐ。
 赤ちゃんは命を分けた私のいのち。
 私の宝の中のたから、あなたが大好き。
 母と子の満たされた二人だけのゆったりと流れる時間と空間。

いとおいしい、慈しむ見えない母子のが、
 母と子との秘密の絆がある。
 お母さんの胸は、顔を埋めこころを憩う秘密基地、
 未来への希望に向かって跳ぶ愛の発射台。
 あなたは愛される為に生まれてきた。
 今もその愛を受けている。
 あなたの生涯は愛で満ちている。
 あなたの存在が
 私にどんなに大きな喜びを与えてくれることか。
 わが子よ、
 太陽のような愛をいっぱい浴びながら成長しておくれ。

おむつを汚しても、夜中に泣いてもお母さんが起きてくれる、
 我が俵を言ってもかまわない、自己中心的でも愛される。
 他の人に何一つしてあげることはないけれど、
 赤ちゃんである存在で
 愛され受け容れられることが自己肯定の原体験になる。
 赤ちゃんは愛される為に生まれてきた。

教育心理学者、E・H・エリクソンは、
 生まれてからの二年間に人生を決定づける鍵があると。
 初めの二年間で赤ちゃんは、信頼と不信を学ぶ。
 だから、自分を愛してくれる周囲の人に敏感。
 周囲の大人が信頼できるか、できないかということ。自分の心と体の欲する必要を満たしてくれると、自分を取り巻いている環境・社会は信頼できると
 赤ちゃんは「三つ児の魂」に刻印する。

こどもは未来です。希望です。

我田引水になりますが、もし「保育園がなかったら？」今の世はどうなっているのでしょうか。家庭も社会も成り立たなくなりかねない大きな存在が保育園の役割です。保育園の存在価値はそのくらい大きいのです。保護者、一般の人、小学校教員そして保育園の保育士で、答えはいろいろ異なるにしても、保育園の存在意義を「保育園という大きなおうちの家庭的環境の中で、生きる力を生み出す子供社会」を存在価値と考えます。

愛された原体験

「大きなおうち」という社会的家庭の思想に支えられて0歳の赤ちゃんから6歳までの6年間も、社会生活の基本を、家族的環境で自然に学ぶのが保育園です。このような愛情に溢れた良い保育園で育った子供は、例え家庭崩壊のような中に遭ったとしても健全に育つ力を育んでいきます。何故なら個別の家庭の崩壊があっても、朝から夕までの保育園という「大きなおうち」の愛で培われた人間への信頼感が、その子を救い、励まし続けるからです。これを愛による人間への原初体験と呼びます。それは、保育園時代を超えて、卒園してからも「保育園で愛された原体験」が生きる力になっていくことを、保育者は知っています。

今大きな教育問題、社会問題になっている不登校、引きこもり、少年犯罪等に関わるようになる人は子供時代に保育園体験のない人が多いというあるデータがあります。事実、保育園卒業者と幼稚園卒業者とを小学校に上がってから、不登校、引きこもり、少年犯罪等で云いますと、約3対6で圧倒的に幼稚園出身者の子供が多くなっているそうです。では保育園卒業者はなぜ非社会的行動をとる子が少ないのでしょうか？

その理由として保育園・保育者は、子供を預かるだけの場所としてだけでなく、保護者の厳しい家庭の実態・環境を全面的に受け止め、子どもの悩みを己が悩みとして悩み、更には子ども達への未来への希望を託すことのできる「生きる力」を育む場としているからです。

学校や企業社会は「競争と比較」の社会です。ここではタフな人間力を持っていないと生き残れません。このタフな人間力の原点となる、しつけ、マナー、ルール、チームワーク、判断力、忍耐力、協調性などを保育園は「教育」という手法システムで教えません。大きなお家の兄弟姉妹の中で、教えあい、助け合いの自然体で育みます。自然体ですから、学校教育型でなく、人間としての人格形成の基礎を無理なく育みながら生きる力となります。就学前の子育ては、学校教育型教

育になってはならず、人と人の絆を深める保育園型子育ての大切さを痛感します。これがキレル子供つくりくない基本です。

豊かな依存体験を十分に

赤ちゃんは、周囲に対する信頼感を基盤に自立していき、その信頼感なしには、自立が出来ないので。無力な子供は自分では何もできないから、誰かにやってもらわなければいけないからです。ところが自分の期待や欲求は、周りの人はそう簡単に叶えてくれない場合です。自分で出来ない、誰もやってくれない。泣いて訴えて、喚わめいても、欲求を満たしてくれない。あれこれ要求しても親や大人に受け容れられなければ、一種の無力感が漂い育っていきかねません。そういう初期体験によって、周囲に対する不信感が生じてきます。

赤ちゃんには欲求が色々あります。オムツが濡れて気持ちが悪い、取り替えて欲しい。お腹が空いた、オッパイが欲しい。退屈だからあやしてほしい。寝入りばな寂しいから側に添い寝してほしい。目が醒めた時、不安に襲われたとき、すぐ側に来てあやして欲しい…。

そのような、自分で解決できない不満や不安、不快感を、お母さんや、保育者が自分に代わって解決してくれる、自分の欲求を十分に豊かに叶えてくれたという経験、これが大切です。特に最初の十二ヶ月は、子どもの欲求が全て認められて、絶対的な欲求が全部叶えられる体験が必要です。依存体験を十分にした子どもは自立が早い、これは自信の強い子になるからです。

決して臆や忍耐強くなどという美名の強制の下では、我慢強い子どもが育つ事はなく、その反対の結果になりかねません。自分に対する無力感が残り体験することになり兼ねないのです。周囲に対する不信感、イコール、自分に対する無力感でもあるからです。これが逆に、周囲に対する信頼感が強ければ強まるほど、自分に対する自信を育むことになる。この自信が、自立していく基本的エネルギーになるのです。

当園のモットー。

「どの子も育つ、明るく、かしこく、遅しく」

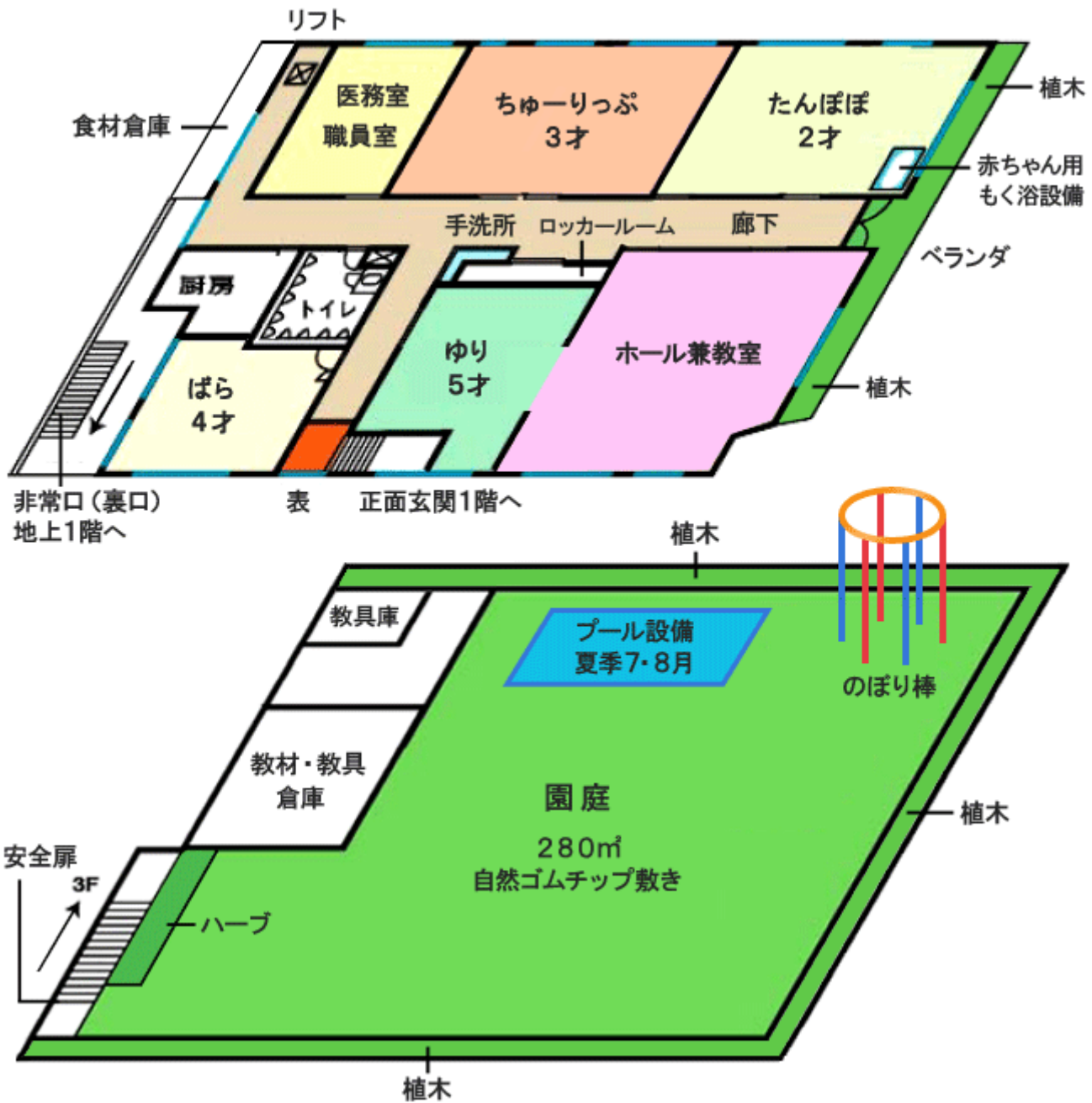
素晴らしい可能性を秘めた幼児達

人の気持ちを思いやる、
優しい心。
困難を乗り越えていく、
たくましい精神。
何よりも深く、そして広がりのある
豊かな心を、
子供達に育てて行きたい。
心も頭も、健やかに育てて欲しい。
それは、全ての親の願いであり、
幼児教育に携わる全ての人々の共通の
思いでもあります。
だからこそ私たち保育者は、
乳幼児期という人生の一コマのこの臨界期を、
理論的に、科学的に、そして具体的に検証し、
それを実践に移し、
この切なる願いを実現していきたいと考えます。
人生のあらゆる基盤、土台が完成してしまう、
大切な時だから…。
心・頭・体という、
いわば個別の働きが、
実は全て脳の働きによるという事実を考えるこ
とから始めます。
人間の赤ちゃんの脳は、
他の動物に比べて、実に未熟な存在として
生まれてきます。
しかし、
未熟は劣等を意味するものではありません。
むしろ、生まれてからの環境いかんによって、
どのようにも育つということであり、
それは、霊長としての人間の子供の
無限の可能性を、
何よりも端的に表しているものです。
未熟だけれど、
素晴らしい可能性を秘めた幼児達の脳…。

三つ児の魂を宿す脳

ヒトの赤ちゃんは
他の動物とは比較にならないほど、未熟に生まれてきます。
全てを支配する中枢、脳の未熟……。
しかし三つ児の魂が宿る迄に、
ヒトの脳は、
爆発的とも言える発達を遂げるのです。
いのち^{みなぎる}漲る激しい細胞呼吸とともに、
旺盛な興味と好奇心の塊^{かたまり}さながら、
目で、耳で、鼻で、舌で、膚で、体で、
見、聞き、嗅ぎ、嘗め、感じ、確かめ、
周りの全てを取り込み、
吸収し、記憶する脳。
信じられない速さでシナプスが芽を出し、
二百億とも言われる脳細胞の宇宙空間を、
縦横無尽に
走り駆け、飛び巡り、天翔る、
その複雑微妙な配線作業の神秘の爆発！
ビッグバンするダイヤモンドの時。
瞬時たりとも休む事なく、
生後二千日にして、
早や脳神経システムネットワーク網の
大方の工事は完了してしまうという
この見えない厳粛な事実。
見える人生百年の、
見えない土台、
根っこが決まる基礎工事の大切な時。
周りの大人は、愛の、目で、心で、両の手で、
環境を整え、援助し、彼の必要を満たし、
動機付けをするだけの応援団。
三つ児こそ、この工事の施工主、主人公。
無限の可能性を秘める
三つ児の脳も、
望ましい発達を遂げ得るよう
教育的な環境、配慮がなければ、
開くことなく蓄で終わってしまいます。
ただの石も、偉大な彫刻家にかかると、
立派な芸術作品に生まれ変わりますが、
彫刻家がその手を措いたそのとたん、
彫像の価値は、定まってしまいます。
脳の発達の臨界期、ダイヤモンドの時、
三つ児の魂が宿る時…
「三つ児の魂百まで」
つくづく、言い得て妙ではありませんか。

ふじみ野 **なかよし** 保育園 見取図



施設概要	
★所在地	埼玉県ふじみ野市上福岡1丁目12番8号
★創立年月日	1964年昭和39年4月1日。昨年度で第45回卒園生〔延べ1350人〕を送り出しました。
★建物面積	637㎡ 教室×6、ホール、厨房、事務室、トイレ、手洗い、210.24㎡の広い屋上園庭。7・8月にはプールを設置、毎日プール遊びを楽しめます。
★構造	当ビルの建築は、当初から保育園園舎の法的基準で堅牢に設計・建築され、特に耐震、防災時にも園児の生命を守ることを最大に配慮したRC三階建てビルです。当ビルは築約30年ですが、最新の耐震検査の結果、当園ビルは、関東大震災程度の地震にも十二分に耐えられる堅牢さがあることを判明致しました。
★定員	100名

園 児 の 一 日

	分園		本園			
	ふたば組 0才(3~12ヶ月)	つくし組 1才	たんぼぼ組 2才	チューリップ組 3才	ばら組 4才	ゆり組 5才
7:00			早朝保育			
8:15	触診・触診		順次登園			
9:00	自由あそび		自由あそび	屋上園庭自由あそび		
9:35	スキンシップ マッサージ	リズム運動リトミック 体育ローテーション	体育ローテーション			
10:00	朝のつどい					
10:20	楽しい集団あそび		楽しい日課活動			
10:50	サンデッキであそぼう お散歩公園へ 自由あそび			発声・歌・メロディオン		
11:00			楽しい課題活動			
11:20	離乳食	昼食	昼食			
11:50	オムツ交換着替え	トイレトレーニング 着替え	トイレトレーニング 着替え	園庭 自由あそび		
12:20			昼食			
13:20			午睡	創作活動 の時間		
15:00			おやつ時間			
16:00	先生と楽しい自由あそび			メロディーにのってリトミック		
16:20	午後のリトミック			園庭 自由あそび		
17:20	ボールなどでの自由あそび					
17:30			順次降園			
18:00			延長保育			
19:00			おやつ時間			

備考：週に何回か大原公園（歩き7分）や中央公園（歩き5分）に園外保育に行きます

通常の毎日の流れ・プログラム(ある日の例)

時 間	1 歳児	0 歳児
7:00	登園・挨拶・視診&合同保育	部屋清掃・ベッド整頓・挨拶・視診 順次オムツ交換(オシッコトレーニング)
8:10	屋上庭園で自由遊び (玩具)	持物整理・連絡帳点検 人数報告・食器用意・子供と遊び
8:50	職員朝礼	職員朝礼
9:00	オシッコトレーニング 体育ローテーション 寝返り・ハイハイ・歩行練習 ぶら下がり・逆さずり・つかまり立ち 体育ローテーション	リズムにのってリトミック 窓を開け一人一人の裸を視診し、笑顔でことば をかけながら、スキンシップをする。つぼをマ ッサージ 肌の状態・運動機能の発達を見ながら、その日 の子供の機嫌、体の健康状態などを診る オシッコトレーニング マッサージ・体育ローテーション
9:30	朝のつどい 乾布マッサージ 名曲鑑賞など	朝のつどい ホールで名曲の音楽鑑賞(CD)
10:00	楽しい日課活動 絵本読み・魔法の箱・季節のうたなど	指遊びや歌など はっきりした発音で声を出す
10:20	中央公園・大原公園などへ散歩または屋上や 園庭に行き遊ぶ。暑い日はサンデッキで行 水・水あそびをして楽しませる 外気浴び・日光浴または行水・水遊び (7.8月)	中央公園・大原公園などへ散歩または屋上や園 庭に行き遊ぶ。暑い日はサンデッキで行水・ 水あそびをして楽しませる 外気浴び・日光浴または行水・水遊び (7.8月)
11:00	昼食	給食の用意・給食(離乳食・ミルク) 食前(食後)手を拭く 食前のお祈り、言葉がけをして楽しく食べるよ うに配慮し援助する
	自由あそび	部屋で遊びながらオシッコトレーニングをする
12:30	午睡	午睡 (ベッドに入り、背中をトントンし、語り かけながら寝入る)・家庭連絡ノート記入
15:00	おめざめ おやつ	オシッコトレーニング おやつを用意・補助をしていく
16:00	絵本読み・積木遊びなど ホールでのリトミック	スキンシップを十分にしながら相手をして遊ぶ
17:00	お帰りの準備	ノート・着替えた洋服等を通園袋に入れる お帰りの歌
17:20	合同保育	保育日誌を書く・ベッド整頓
18:30 ~19:00	延長保育・降園・夕刻のおやつ	

○ 印はオシッコトレーニング

2 保育の内容

保育所保育指針に定められている幼児教育の六領域（健康、言語、自然、社会、音楽リズム、絵画製作）に基づき豊かな愛情をもって個性を尊び、伸ばす保育を行います。

「もじ」「かず」「ことば」（英語）「絵画造形」等の遊びとしての繰り返しを通して「動き・ことば・リズム」のある楽しい豊かな環境の中での保育を行うことにより幼児の本来的に持っている欲求を満たし、幼児期でなければ育つことができない人生の”根”となる”知・情・体”の調和のとれた基礎能力を育てます。やさしさ（心）、かしこさ（頭）、たくましさ（体）を日常の保育活動の中で先生との信頼関係が自然に身につけていきます。

主として五、六才以降の後期幼児期から育つ「創造力（想像力）思考力」等の能力へと個性豊かに成長発展していく人生の土台作りをしているのが当園の幼児教育です。



次の4つのことを主な保育内容とします

▲1. 聖書の教えを通しての豊かな宗教的情操を養う。

礼拝を通じて目に見えない人間を超えた大きな存在である愛の神様を知り、神に感謝のできる心を育て、友達に親切にし、両親、家族などの隣人に対して暖かな心を抱きすべての人に感謝し思いやる心を養います。

▲2. 基本的な生活習慣のしつけ。

朝夕の挨拶、食事の作法、身のまわりの整理整頓、衣服の着脱、トイレでの排泄等の日常生活の基本的なしつけと正しい生活習慣を身につけさせます。

▲3. 言語の発達をうながす。

言語の力は人間形成の基本となる能力として重視し、「ことば」「もじ」の経験を豊富にし「話す」「読む」さらに書く表現能力を育てます。

園が実践してきている保育理念を重ね合わせ、次の三つに纏めることができます。	
・意欲	何事にも前向きに積極的に取り組む.....はげむ（個性・主体性）
・心情	こころ豊かに、友達や自然と関わる.....おもいやる（隣人愛）
・態度	周りの人と、健全な社会生活を営む.....がまんする（自制心）

▲4. 健康な子供に育てる。

毎日いきいきと活発に繰り返し展開する体育ローテーション、リトミック、によって幼児期に形成される運動の基礎的能力を育て幼児の健康の増進をはかります。

☆ 子をその道にふさわしく教育せよ。そうすれば年老いてもそれからはなれることがない。

---聖書。箴言 22 章 6 節---

あなたは高価で尊い

赤ちゃんは、
一人歩きするまでに、
一年という長い年月がかかります。
それが、他の動物と違うところ。

人間と動物の境を
ほうこう
彷徨している乳幼児
その期間はビタミン愛を注ぎ
人間になるために
神様から母親に与えられた
大いなる準備期間。

あなたは、
かけがえの無い、
何にも替えられない私の宝。

私の愛し子よ、
胸の中に埋もれておくれ。
頬ずりし、ほっぺをくっつけ合い、撫でて、
おんぶをし、あやし、目を見つめ合い、
子守歌を歌い、語りかけ、おしめを変え、
添え寝をし、
イナイナイパーやタカイータカイをして遊び、
そして、思い切りおっぱいを飲んで、
疲れたらぐっすり眠っておくれ。
笑う、泣く、あーあー、うーうー、
赤ちゃんことばでしゃべり、
手や足をバタバタ動かし、
お母さんの笑顔、声の響き、リズムに縫れ、
もつれ
絡む笑顔、弾る声。

大好きな、大好きな高価で尊い存在、
私はあなたを愛している。
人は信じられるものである。
これから生きて行く人生は、平和なものである、
という基本的信頼感を

肌を介して赤ちゃんの信ずる
心のプログラムにスイッチを入れること。
子育ての中で体験によって
教えるということ。

母と子の絆を作るという体験をとおして
赤ちゃんの心の中に染み込ませていくこと。

赤ちゃんは必ず自立的に
そのことを取り込んでくれます。
体験を内面的なものに消化する能力が
どの赤ちゃんにも
備わっているのです。
プログラムされているのです。

生きる力を育てる苗代…

子供は風の子、太陽の子。
一年の大半を、はだか、はだして平気な子供達。
どんなに手ごわいインフルエンザでも、
この子供達には叶わない。
生きいきと輝いているその顔、かお、カオ、……
朝9時、なかよしっ子の一日が始まる。
ハイハイ赤ちゃんスキンシップマッサージ。
ヨイショで立ち、リズムでリトミック。
走れスイスイ、小リスのように。ピアノに乗ってリズム運動。
飛べ、小鳥のように。
舞え、蝶のように。
走れ、兎のように空高く。
風に乗って軽やかに、体育ローテーション。

動きやすく安全で、天然素材のゴムクッション。
280㎡の広々とした屋上園庭。
そこが彼らの、飛び、舞い、走る……運動天国。
マット、平均台、登り棒、鉄棒、ジャングルジムなどの林立の中を、
前転、後転、側転……歩いて、登って、逆上がり。
しかし、何より彼らを駆り立てるのは、何ととっても跳び箱！
三歳児の4段跳び。
四歳児の前転跳び。
五歳児のヘッド跳び。
7段、8段、……やったア、10段！
体一杯のパワーで挑戦する眼、目、め、メ、
そして芽^{やぐどうかん}。
軽やかに、生きいきと、躍動感があふれ、
からだ一杯で躍動するリズム、エネルギー、パワー。
やったぁー、達成感、
できたぁ、成就感。
挑戦というエネルギーが生み出す、
自信、誇り、満足感。
「生きるいのち」が育まれているこの時、
生きる自信。
生きる誇り。
生きる満足感で満たされ
人が生きる時
「生きる力」が育っているのです。
三つ児の時に育つ魂^{そだつたましい}、それが「生きる力」
いのちにあふれた、逞しい苗達。
そんな苗たちを育てる苗床、そんな苗代が、
「なかよし保育園」です。

それが『なかよし保育園』です

保育園にはさまざまな経過と背景を持った子供たちが入ってきます。「子育ての根っこ」に拘った保育をすれば、子供はどう育つのか。それは、全ての子供が“しあわせ”に生きることを保障される保育であり、子供にとって「最善の利益」とは何か、その実現なのだと考えます。私達は、そのような子供達のしあわせを“三つのしあわせ”として次のように捉えています。

1. 子供が、毎日を心安らかに、安定した気分で過ごせること。

子供は、親や保育者から愛と理解と信頼を受けることで、全てを安心して委ねることが出来ます。子供は親や保育者の眼差しを通して、自分が愛されていることを感じとります。優しい言葉かけや共感を伴った言葉かけを通して自分が肯定的に理解されていることが判ります。暖かい肌ざわりや抱きしめられた時の親や保育者の香りから、深い一体感を覚えます。子供は身体の一部を通して、親や保育者の愛と理解と信頼を感じ取った時、毎日を心安らかに、安定した気分で過ごせるのです。これが、子供がしあわせを感じる第一の条件だといえます。このような、しあわせを感じた子供は、自己を安心して発揮できるし、自己充実を得ることが出来ます。そして、明日への展望や未来への希望や意欲を燃やすことも出来るのです。反対に、このような幸せ感を得ることが出来なければ、不安と緊張中で人を受け入れることもできず、敵意と憎しみの中で生きることになるのです。又、恐れとか焦りのような、情緒的な不安定の中で過ごすことにもなっていくのです。

2. その子なりに打ち込めるものが保障され、それが生きる喜びになっている。

最近の子供達には、意欲のない子、指示されなければ自ら動こうとしない子、どうすれば良いのか判らなくて指示を待っている子、自主的に、積極的に物事に取り組めない子、自発性も意欲も感じられない子、感動に乏しい子、表情の乏しい子、創造性に欠ける子などがみられます。このような状態像を示す子に共通していることは、現在のその年齢までに自らの感情や考えに基づいて、自分なりに自分の力で何かに取り組んだ経験が無かったということです。つまり、自己発動性に則った行動をしてこなかったか、それが許されなかったという経験を持っている子です。親や保育者が忙しがって、子供が自分でやろうとしていることを待

ちきれず、声をかけたか、手を出してしまったのです。子供の内面に自発性・主体性（自主性）を育てることに気づかず、早くに何かが出来るように仕向けてきたのです。スポーツとかピアノとか、絵や習字や、兎に角、目に見える能力をつけさせようとする親心が裏目に出て、子供の自主性を育てる事を忘れてしまったのです。

その子なりに打ち込めるものを持ち、それが親や保育者に認められ、保障されている子は、物事に対し新鮮な感動を持って、自ら挑戦していく意欲をみせるものです。その時に、努力すること、我慢すること、誠実さなどが身につくのです。これが、しあわせを成立させている第二の条件だと思います。

3. その子の存在が周囲を明るくし力を与え、育ち合うエネルギーになっていること。

子供たちに、ゆとりも潤いもなくなってきました。自分さえ良ければという勝手な行動が目立ちます。我慢出来ない、思いやりも気配りもない、友達や先生の言うことを聞き入れようとしない、楽なことばかりして嫌なこと、辛いことを避ける、やりっ放しにして責任感がない、衝動的になる等の行動が多くなりました。このような現象を示す子に共通していることは、親や保育者に認められていない、肯定的に受け入れられていない、楽しさや喜びや感動の共有感を経験していない、そして、集団の中でもそのことが実現されていない子です。集団の中で、その子が主人公になった喜びの体験を持っていない子たちです。

それは、クラスがどの子も同じ仲間として認め合い、助け合い、育ち合っていないからです。その子の存在が周囲に認められ、大事にされていけば、その子の存在もまた周囲を明るくし、育ち合うエネルギーになっていくものです。一人は皆のために、みんなは一人のためにあるような、そういう関係の中にあること、それが、しあわせの第三の条件であると思います。

「子育ての根っこ」に拘った保育とは、このように、しあわせの三つの条件を実現させた子供を育てるということです。そして、この三つの条件は、我々大人にもそのまま当てはまる“幸せの条件”だと考えます。同時に、保育とは、人間が幸せに生きることを実現させるためにあるのだと思うのです。

これら三つを当園が実践している保育理念と重ね合わせると、次のように表すことができます。

- ・意欲：何事にも前向きに積極的に取り組む……はげむ(個性・主体性)
- ・心情：こころ豊かに、友達や自然と関わる……おもいやる(隣人愛)
- ・態度：周りの人と、健全な社会生活を営む……がまんする(自制心)

これら三つ児の時でなければ育たない三つ児の魂、三本柱……まさに「生きる力」そのものです。

なかよし保育園は1963年創立、50年、以来人生の土台、広く、深く、根っこが育つ幼児期にこの遅い「生きる力」を育てる豊かな苗代でありたいと、願い続けてきました。

保育園の役割

当園は創立 50 年。30 年以上前から「良い子育てと、充実した仕事は、必ず両立する。」とのスローガンを高く掲げ、保育園、幼稚園に拘わらずどのお子さんにも獲得されなければならない人間力としての「生きる力」は幼児期にこそ獲得されなければならない、との最新の脳科学が教える知見に従い、子どもが育つ「最善」の環境を与える事によって、バランスのある総合的な環境を与える毎日の繰り返しこそどの子も育つ「明るく、賢く、逞しく」との保育方針を貫いて参りました。

少子化対策等の子育ての議論を深めるほど、保育園の存在が増えています。何故なら赤ちゃんからの子育ての経験あるスタッフと施設を備え、子育てのノウハウを蓄積しているのは保育園だからです。

これは保育園の歩みそのものであったからです。しかし保育園にも色々あり、その保育機能としての内容は玉石混合です。しかし保育所保育指針に『養護と教育は一体であり、豊かな人間性を育成』と謳われております。

この保育指針の精神をいかに実現し、保育のレベルアップを目指す事が保育者に問われております。これが少子化時代を克服する最強の子育て支援策です。

その理由を以下にまとめてみました。

生みの親の喜び

- ・ 出産の感動
- ・ 血縁による豊かな愛情
- ・ 母親によるしつけや教育
- ・ 添い寝による子どもの安心

そして今家族のパラダイムが崩壊しそうな現実もある

- ・ 共稼ぎによる夫婦のすれ違い
- ・ 子どもと接する時間の激減
- ・ 一人っ子による子どもの孤立
- ・ 子育てを知らない母親の激増
- ・ 離婚による片親家庭の激増

保育園は家庭(家族)の不足点を補う。

保育園が支えて、子どもの健全育成

- ・ 他の子どもとの出会い
- ・ あそびの喜び
- ・ 異年齢保育による兄弟姉妹的体験
- ・ 楽しい食事
- ・ モノづくり
- ・ 音楽の楽しさ
- ・ さまざまな「あそび」の創造
- ・ 観察力、表現力などの開発
- ・ 年齢に応じた学びの楽しさ
- ・ 日本語の持つ独特の響きやリズムで言葉獲得の楽しさ、
- ・ 乳幼児・幼児期は国際語である英語で遊び、獲得する最適期。

保育者は子供の躰、遊び、友達関係等を育みつつ、子どもの社会適応力を深める。核家庭社会最大の欠陥の「子育て環境の喪失」を補完するのが保育園

保育園三つの機能

- ①子どものあそび力と社会適応力を創出。
- ②親の子育ての不足点を補完、援助。
- ③家庭と仕事の両面を支え、家族生活のバランスを保ち、併せて家族の危機を救う。子供の育つサンマ・仲間、時間、空間(場所)をいかに豊かに保障して上げられるか。「子供を預かるだけの単なる場所」が保育園ではない！

家庭
子育て

仕事
家計

支点は
保育園

保育園と親との共通の絆

保育園と父兄とは「良い子育てをする」という共通の絆で結ばれております。下の左欄は親としての立場、右欄は保育園との関係の中での考え方。子育ての問題は必ず解決への道筋、答えがあります。保育園はその手助けをする為に、今更ながら、若い親御さんに対してその為の啓蒙とコミュニケーションの大切さを痛感させられます。

親としての5つの反省

- ・ 家族より仕事優先を反省
- ・ 家族より仕事の付き合い優先を反省
- ・ 忙しさを理由に、保育園の先生と登園や降園の時、子供のお話をあまりしなかった反省
- ・ 家族より趣味を優先した反省。
- ・ 子供の立場でなく、親の考えで判断する育児を反省

これからは「家族愛」を生活の中心にしたいです。深い家族愛があれば、難しい保育も励みになり、家族全員が幸せになります。家族愛で保育園と連携すると、より具体的な行動になります。子ども・親・保育者が一体になることで、家族が「家族力」として子供に良い影響を与えることができます。

親として本気で取り組みたいこと

- ・ お母さんは、育児を保育園に任せっぱなしにしない。毎日保育士と小さなことでも伝え合う。
- ・ 保育園の保育・育児内容を知らず、権利や要求ばかり言ううるさいだけの保育者にならない。
- ・ 子供は親を映す鏡であることを知る。
- ・ 保育園の行事参加だけでなく、日常の保育参加を体験し、子どものありのままの姿を知る。
- ・ お父さんは仕事だけの片輪でなく子育ての両輪で人生を歩む決意をする。

子どもの前で、保育園の悪口や保育士の批判をする親がいます。子どもは大好きな保育園や先生を批判されると、子どもの心に深い傷が付きます。子どものために、保育園と一体になって子育てするひたむきな親の姿に、子どもは安心し、親を信頼します。

悪いことは「いけません」と子どもを納得させる親になる

いけないことが何か判断できない子どもにしない。
例えば、食事の悪いマナー、友達とのけんかや遊びのルールや、その破り、悪い言葉づかい等がなぜいけないかを説明する親になる。
「ダメなことはダメ！」としか言わないはダメ。「そんなことしたら先生に叱られるよ」と言って自分の意見で子どもを育てない親にならない。

「いけないこと」を判断することができない子供になったら、集団生活や社会への適応力を持たない子供になります。常に自分の欲求を通すことだけでなく、相手の事を考える習慣をも身に付ける。これが小学校入学後の人間形成に重大な影響を与えます。引きこもり、ニート、フリーター化や家庭内暴力への芽がここにあります！

子供は心が動かなければ、体も動かない。
 子供は本来、したががり屋、やりたがり屋です。子供は自由です。友達・大人の真似をし、再現しようとして。それが創造力を育む原動力になります。
 私達は、子供の持っているこのような“宝物”を本当に大切にしながら育てなければなりません。子供は本来、ユニークであり、個性的であって、夫々の持つ創造力をかき立てながら旺盛な興味と好奇心を持って動いているものです。しかし、現在の子供を取り巻く環境は、自ら自由に動ける場を狭めてきています。家に帰って遊ぶ場所(空間)が、遊ぶ時間も、遊ぶ相手(仲間)、いわゆる三間(サンマ)がないのです。今の子供の遊ぶ玩具はメカロボットのようなテレビの映像を固定的になぞる事だけです。

今こそ、子供本来の生き生きした、新鮮な魂を呼び戻すべきときです。そして、ユニークで、個性的な想像力を生かすべき時だと思います。日々の生活の中で、自由なイメージを共有し合う遊びを取り入れたいものです。一人一人の子供が持つイメージを出し合っ
 て遊ぶ楽しさを共感させたい。想像力を駆使して、もっと自由な、もっと広がった遊びを出現させたい。それは、子供の想像力を大切に受け止めているからです。自発性や創造性が伸ばされているからです。友達とイメージを交流し合っ
 て遊ぶことが実現出来ているからです。子供と保育者が楽しさを共有し合いながら、共感、共鳴し合っているからです。そこには子供の自由が保障されている場所(空間)があり、時間があり、仲間がいるからです。

保育園は両親の子育てを助け・補い、補完し、子供の大切な成長発達体験を与える場です。

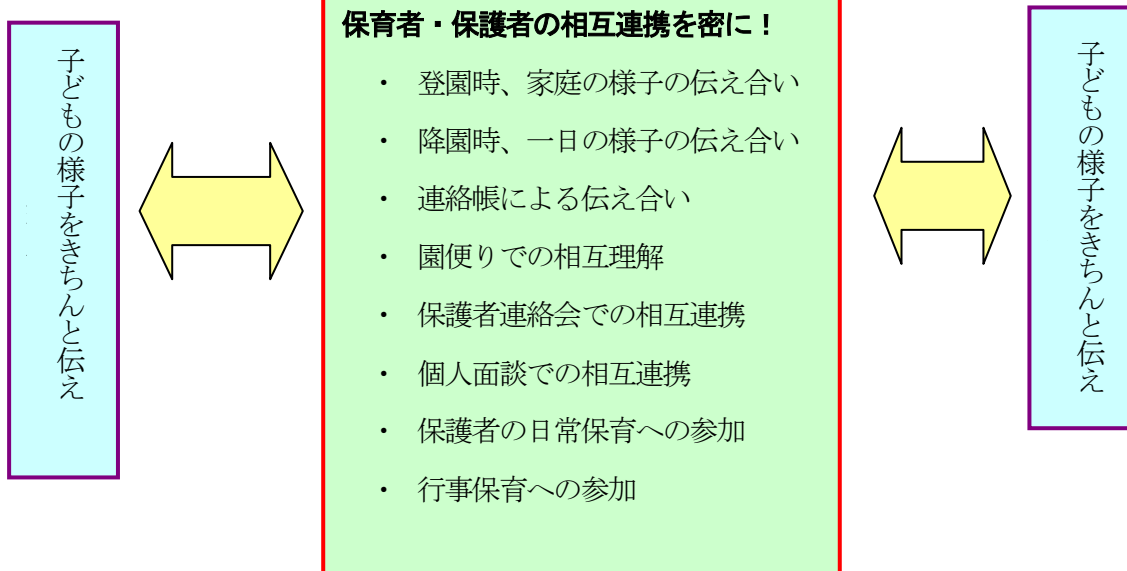
例えば：

- ・ 異年齢保育による兄弟姉妹的体験
- ・ さまざまな遊びやものづくり創造体験
- ・ 「食育」を大切に大勢でする楽しい食事。
- ・ 色々な音楽を知り踊り、歌う喜び体験。
- ・ 集団生活のルールやチームワーク体験。
- ・ 対人関係の躰やマナー、挨拶の習慣化
- ・ 各種施設などの見学で社会環境に適應する体験・
- ・ 当園での変化に富んだ四季夫々の行事は子ども達をして、行事ごとに一段と自信と逞しさ成長をもたらします。

保育園は大きな家族。

核家族化して「小さな家族」になって現代社会で、保育園は、「大きなお家」として家庭の足りない機能や役割を果し実現しています。

保護者と保育園の信頼関係や連携によって子供に、大きな幸せ体験と成長・発達を積み上げます。



保育の考え方

当園ではキリスト教のおしえを通して豊かな宗教的情操を培い、思いやりと感謝する心を育て、強く逞しい心身を育てるものとする。さらに0歳児期は、人間として成長する諸能力を最も豊かに内蔵し、著しく発達する時期であることが明らかにされています。従って当園では、「知、情、体」の調和のとれた総合的な保育環境を整え、「動き、ことば、リズム」を基調とした適切な経験を与え、リズム、テンポのある楽しい雰囲気の中で毎日繰り返す活動により、乳幼児期でなれば大きく育つことができない視る、聴く、動く、触る、味う、等の五感を養うと共にさらに人間たる最も大切な“ことば”の発達の根っことなる基礎能力を培うことにより、乳幼児の生まれながらに持っている天分を豊かにはぐくみ心身の全面的な発達を期すと同時に情操的にも安定した、愛情に満ちた豊かな環境を与えなければなりません。

保育実践内容

乳児は生まれたその瞬間から、見たり、聞いたり、ふれたり、味わったり、においをかいだりして五感をフル回転させて、外の情報をとり込んでいます。目や耳、皮膚、舌、鼻、などの器官を通しての豊かな経験をさせたり、その子の発達に合わせてちょうどいい時期に、ふさわしい刺激を繰り返し与える。

I. 感覚

乳幼児は、生まれたその瞬間から、見たり、聞いたり、触れたり、味わったり、臭いを嗅いで五感をフル回転させて外の情報を取り込んでいます。目、耳、皮膚、舌、手を通し脳の中に情報が伝わっていくのです。

平衡感覚 自分の体が地球の引力の方向に対して真っ直ぐか、傾いているのか、さかさまなのか、止まっているのか、動いているのか、止まりつつあるのかに関する感覚、耳の奥にある三半規官を働かせ、平衡感覚を鍛える。

固有感覚 体のすみずみの筋肉の伸長、収縮の出合い、関節の曲がり方、伸び方、腱の状態などに関する感覚。

皮膚感覚 皮膚表面に神経の末端容器が配置されていて、痛み、暖かさ、接触なども感じ、脳に伝えます。やさしい抱きしめを快と感じ、情緒発達、安定の基礎になります。

聴覚 いろいろな名曲を聴かせ楽しむ。いろいろな生活音を聞かせ音への反応を促す。リズムに反応する。保育者の肉声を聞かせ情緒の安定を促す。

視覚 視線を合わせる。左右の追視から徐々に追視の幅を上下左右と広げていく。ボール等を転がして目で追う。(目と手の協応) 動くものをしっかり目で追う。(注視) 高いところを見上げる(注視)から周辺視へと進んでいく。

☆ふれあいあそび

平衡感覚 1.寝返りゴロゴロ 2.でんぐり返り(ローリング) 3.抱き上げてぐるぐる廻り 4.トランポリン 5.ぶらんこ 6.滑り台 7.ハンモック 8.ゆれ木馬 9.動く乗り物に乗せて引く 10.高い高いをする。

固有感覚 1.手足の曲げ伸ばし 2.手押し車を押す 3.腹ばいの姿勢から飛行機の格好をする 4.棒にぶら下がる。 5.ハンドルを回す。 6.荷物をもって歩く 7.荷物を担ぐ 8.せつせと歩かせる。

皮膚感覚 1.ギュッと抱き締めたり、そっと抱きしめる 2.乾布摩擦、指圧をする 3.くすぐる、コチョコチョ遊び 4.肩や背中をとんと叩く。手をつなぐ 5.抱っこ、おんぶをする 6.沐浴をする

7.プール遊び、水遊びをする 8.頭と頭をごっつんこ 9.タオルで顔や体をふく

聴覚 1.言葉を豊かに聞かせる 2.一つ一つの名称を教える 3.喃語に対して返事をする 4.歌って聞かせる 5.音のする玩具で遊ぶ 6.古今東西の名曲を聴かせる 7.絵本を読み聞かせる。

視覚 1.いないいないバナー遊び 2.かくれんぼ遊び 3.ボール転がし 4.しゃぼん玉 5.風船遊び 6.揺ら揺ら回転するモビールを目で追う 7.オルゴールを吊るす 8.絵本を見る。

II. 運動

乳幼児はミルクを飲み良く眠り、排泄のオシメを代える。この連続的な毎日の営み、それが新生児、乳幼児が育つことであります、子育てであるように一般的には考えられています。たしかに身体的、生理的な成長のためには、絶対的に必要なことであり、大切なことです。しかし、乳幼児と言えども否、霊長たる人間の基礎基盤が形成される乳幼児だからこそ、それが育つにふさわしい環境が用意されなくてはなりません。勿論身体的にも大きく成長する時でもあります、それ以上に情緒的にも安定した人間的な信頼関係がなくてはなりません。本来幼児は生まれながらにして自分が愛されること、優しい笑顔、リズム感に溢れた豊かなことば、それに美しい響きの音楽等に限りなく魅かれるのです。そうです！生まれながらに人間として生を受けた人生の第一歩、それが新生児であります。

真・善・美、愛の溢れた環境に包まれ、満たされることにより情緒的にも安定します。生理的にもっている心と体の発育するプログラムは、脳の神経細胞を組み合わせたネットワークシステムを働かせ外の環境に適応しながら発達を遂げていくのです。それは心と体のプログラムが夫々別々に働いているのではなく両者が相互に関連し合いチューニング(同調)し合いながら育っているのです。従って、このようなことを体しながら日常の保育を実践しており、その一環としてプログラムが“スキンシップ活動”であります。

保母と幼児が一对一で、保母の豊かな表情、優しいことばをかけながら素手で身体全体をマッサージしたり、又指圧でツボを押さえることによって、身体的にも快なる間隔に満たされ、情緒的にも安定するのです。そこには、保母と幼児との一体感、信頼感が醸成され、文字通り豊かな“スキンシップ”が成り立つのです。勿論、その結果ツボの指圧、素手によるマッサージは消化器等の内蔵を強化し、皮膚を刺激することによって健康を増進し、身体の発達に大きな効果もあります。このように幼児の心と体にとってすばらしいスキンシップ、文字通り心と心の通う活動の時でもあります。

☆スキンシップ活動

•(1ヶ月半～3ヶ月) 1.足の指圧、マッサージ、曲げ伸ばし 2.手の平をゆっくり開く、手の指圧 3.腕の指圧、マッサージ 4.腹

部のマッサージ 5、腹ばい運動 6、背中の指圧 マッサージ 7、抱っこしてゆする 8、首をしっかり持ち高い高い

- ・(4ヶ月～1歳) 1、足の裏を指で押して刺激する(指圧) 2、足の指圧とマッサージ 3、両足の屈伸、交互屈伸、垂直に上げる 4、手をゆっくり開かせ、5本の指の名称を言いながら指圧、マッサージ 6、両腕の指圧、マッサージ 7、腹部マッサージ 8、膝の上で上下、横に動かし船を漕ぐ 9、膝を段々上げて背中を反らす 10、つかまり立ちの練習

■体育ローテーション

- ・ローリングマットを使用して前転運動を行う。・ハンモック遊びをとおして平衡感覚を鍛える。
- ・バスタオルに乳児を乗せ歌をたいながら揺すり、三半規管を働かせて平衡感覚をつけていく。

- リトミック・ピアノに合わせて(兎とかめの曲)ハイハイ運動を十分に作る。「子守歌」でネンネ・「やきいもコロコロ」脇を支えてゴロゴロ、抱っこでゴロンゴロン、上手になったら競争したり、追いかけてこしたり。

■裸 ・はだしで交感神経が活発に反応できるようになり、それまで体温調節を知らなかった。赤ちゃんの身体に体温調節機能ができ上がって風邪をひきにくくなる。・入園当初の子には裸保育に対して十分注意して徐々に行う。裸足 ・裸足での生活を積極的に採り入れる。裸足で生活することにより土踏まずがはっきり表れ、立った時の重心もしっかりと足の指を使って立てるようになる。・裸足の方が足に解放感があり、歩く際の安定感も高くなる。・運動能力やバランス感覚と共に、情操教育や知能の発達の間でも良い影響が見られる。

■起こすとき親指をつかませて起こす。(握力、手の筋力の発達)

■ベットの上におもちゃをぶら下げて手を伸ばしてしっかりとつかませる(目と手の協応能力)

III.食物

乳幼児にとって食物は単に体を育てるということ

とに留まらず、脳{こころ}の形成発達を促し栄養源であるとい事が分かって来ており、子育ての基本は食に負うところが大きいとの考えから、専門の栄養士により献立、調理されております。

※**離乳食** 出来るだけ加工食品等は避けるように心掛け緑黄色野菜、海藻、穀物の材料をベースに調理した食事を与える。・現在、何らかのアレルギーを持った者が多いが、早くから動物性蛋白質を与え過ぎないようにしている。アレルギーは先天的な体質によるものと、農薬添加物等に起因する者があります

・生きて行く上で一番大切な食するという作業(ミルクがしっかり飲める、離乳食がしっかり食べられる)に対して意欲的であるということは、全てのやる気、意欲を育つことにも繋がりますので1人1人の子供の様子を見ながら取組。・糖分の多い飲み物、食べ物は幼児の健康を害する物が多いのでさけ、甘い食物はさけ、穀物中心にし、それに小魚等のカルシウム分の多い素材を使って行く。

IV.生活習慣

- ・リズムある一日の流れになるよう働きかける。・遊び、食事、睡眠をはっきりさせてあげる。・堅い布団の上うつむきで寝かせる。・月齢の低い子は泣いたら欲求を満たしてあげるよう心掛け、月齢が高くなるにつれ、与えるばかりでなく自分から動こう

とする意欲、いろんな物に対する興味を持つように働きかけをする。・外遊び、外気浴をさせ、豊かな体験を与え、自信を積み重ね、適応行動がとれるようにそだてる。・月齢と共におっしこトレーニングをしていく。・這い這いを十分にさせる。

V.社会性

・言葉を豊かにする働きかけ。日常の話しかけを優しく、ゆっくり、はっきりした発音で多くする。絵本等読む。

・毎日同じことを繰り返して話す。大脳生理学的からもオギャア一と生まれた時には脳の中でも高等な働きをする大脳皮質だけでも140億もの神経細胞があり、生まれた後はもう増えることがない。細胞の数が増えないとしたら、では脳の発達していくためには、脳の神経細胞からアンテナのように出ている樹状突起の回路を密につながることが、即ち脳が発達するという事です。刺激を与え、回路が出来てもそれを使わなければ回路がなくなってしまう。繰り返し使っているとしっかりした回路が保れ強化される。

・喃語が始まる頃から相手し、返事をしたり補強してあげる言葉がスタート受け止め、幼児語を使わず、はっきりした日本語で繰り返してあげる。・異年齢の上のクラスの子供達や多くの人との交わる機会を多くする。・なぜ色々な刺激や脳の回路を多くするのか?・能力開発、学校の成績の良い子、知能指数の高い子はほんの一面です。・人間のすべての能力の基本となる重要な部分は、1歳までにはほとんど出来上がり、ピークです。

・では訓練をすれば回路の時期が早められるかというのは不可能です。脳の場所によって成長発達が異なり、相応しい時期ができるよう遺伝子によってプログラムされているからです。

・乳幼児の脳の凡ゆる部分が活発に回路がつけられるのは歩き始めるころ、1歳前後がピーク。ですから、この時期が一番このチャンスを逃さずにこの時期までに色々な物を見せたり、音を聞かせたり、触らせたり、体を動かしたりしてあらゆる刺激を同時に沢山与えて上げたいものです。

VI.まとめ

少子、少産化時代を向かえた現在、0歳児を保育園に入園させて働く親達には色々な思いがあり、その思いを背負いながら入園してくる赤ちゃん達です。親にとってまず第一歩は安心して預けられる。子にとっては、寝、食、遊が安心して受けられる。安心して預けられる環境を満たし、尚且つ良い子育てをしたいという親、保育者の願いを受け止め、対しながら日々保育をしています。現在子供を取り巻く社会環境には「立てば漫画、座ればファミコン、歩く姿は塾通い」という言葉が出てきています。こういう現実の中でどうすれば問題を解決出来るかを考え、そして行動出来る子供達になって欲しいと思います。

頭のとっぺんから足のつま先まで動かし泣き、「ミルクが欲しい」「抱っこ」と懸命に全身でエネルギーに表現できる姿、その乳幼児に、素晴らしい未来があることを願い、日々大切に関わっていかうという思いです。

☆保育者は、彼らのそのような欲求を受け容れ、輝かしい未来を祈り、全身全霊を持って日々の保育に大切に関わっていくよう願っております。

一日のスタートは運動活動から

- ・ 0才児には赤ちゃんにはマッサージ・スキンシップ体操。
- ・ 一才児にはリズムリトミック。
- ・ 二才児はリトミック。
 - ・ そして三、四、五才児には280㎡に広がる屋上園庭での体育ローテーション。

さわやか
爽な早朝、一日のスタートは体を動かす運動活動からと、0歳児から年長5歳児までの全園児たちはそれぞれ年齢相応の活動でエネルギー一杯に体を動かす。特に朝一番の運動は、一日の生活リズムを整え、一日の全てがここからスタートする。そこで、当園の特徴的な活動の一つとして、朝一番に年齢別にスタートする運動活動。

この体育ローテーションは、マット、平均台、のぼり棒、跳び箱等の運動用具を有機的に配置し、子供達にそれぞれの活動に、楽しくテンポ良く取り組むのです。身体の様々な運動機能を、遊びの感覚で、万遍なく発達します。それは子供は本能的に大好きな森の林の中をかけ回り、木登りしたり、ぶら下がったりと、自然豊かな中で子供達は育ってきました。子供達は本能的にこのように体を動かしたり、冒険したりすることが大好きで、しかし都市化したこの地域では、それを望み得ても、そのような子供が育つ自然の再現は不可能です。林立するのぼり棒、トビ箱、平均台、マット等、それはあたかも自然の再現のような、環境を与えることが必要となってきました。さらに身体の動かすことは、身体のみでなく、やる気、意欲、気力、集中力等人格の形成のうえにも、大きく影響を及ぼし合いながら成長発達していきます。新しい目標に意欲をかりたて、それが出来ると、次の新しい目標に挑戦しようとする向上心が芽生えて来ます。これを毎日繰り返すことによって、目に見える子供達の体力や運動能力だけでなく、目には見えない、この時期に育つ大切な能力、逞しい意欲、やる気、自信という精神力が育って行くのです。運動は逞しい人間性、「生きる力」を育むために、欠かすことのできない活動の一つです。人は体を動かすことによって気持ちがりフレッシュします。特に幼児は身体一杯、満身これエネルギーの固まり、体を動かし、躍動運動することで発散させ、そうして欲求が満たされ、情緒の安定が得られるのです。未熟から成熟へ、脳の発達という観点に立てば、幼児期は一つの完成期です。特に体を動かす運動は脳の発達、人間形成の上からも中心的な問題として位置づけられなければなりません。幼児の脳の発達の特質、特徴をめぐる最新の知見や認識が、幼児たちの毎日の生活経験、保育実践に生かされる環境を与えなくてはなりません。朝一番のローテーションは、子供達の心の核心が宿る脳の発達を見つめつつ、逞しい心、頭、体を育み、導くために営まれます。

脳科学が教える子供が育つ三つの大切

第一. 幼ければ幼いほど脳の成長は著しく、未熟から成熟へと導く教育的可塑性が大きい。

この世に生を受けてわずか数年、しかしこの時期こそは、140億個の脳細胞が激しく呼吸し、生を漲らせている時です。幼児教育にも深い造詣を示された大脳生理学の権威、東大教授故時実利彦博士が、いみじくも「全ての人間に共通な、そして私たちを、他の動物やコンピューターと区別して、人間たらしめ『人間である姿』は、どこに求められるのか。それは、私たちの精神を生み、心を育み、諸々の行動を操っている脳の仕組みこそ『人間である姿』である。人は脳によってのみ、喜びも悲しみも、笑いも冗談も、また嘆きも苦しみも、悲しみもあることを知らなければならぬ。特に我々は脳あるがゆえに思考し、見聞し、美醜を知り、善悪を判断し、快、不快を覚えるのである。脳こそ即ち、人間の姿である。」人間を人間たらしめ、動かしているのは、全ての脳の働きによるものだからです。脳こそが、人間である姿に違いありません。豊かな情感、逞しい精神、優れた運動機能…私達が育てたいと願う人間のあらゆる働きの全てが、唯一、『脳』で営まれるということをし、しっかり見つめていきたい。

全ての赤ちゃんは140億個もの脳細胞をもって生まれて来ます。この天文学ともいえる膨大な数の脳細胞は、生涯に亘って増えないという点で、他の体細胞とは全く違います。人間の脳が成長するとは脳の神経細胞から芽吹く神経回路の配線が、シナプスを作りながら濃密に絡み合うことです。子供達が五感(目、耳、鼻、舌、身)から得る刺激の如何によって、成長配線の仕方が違ってきます。母親の声、動き、表情、掌の感覚、身の周りの全ての刺激を吸収して脳は育っていきます。見る・聞く・話す・感じる・動くという繰り返しを豊かに持つほど、子供達の中に着実に、それぞれの能力として定着して行くのです。幼児の発達を考える際に大切なことは、二歳までに60%、四歳までに75%、そして六歳までに90%と、脳細胞間の配線が完了し、構造が出来上ってしまうことです。そして残りの10%は、二十歳位までに、緩やかに成長して行くと言われています。

幼児教育では、臨界期と言う言葉が用いられます。最も大きな成長を遂げ、然もこの時期を逃しては、能力の定着が困難になる一時期を指すものです。誕生から間もないこの幼児期こそは、生涯を通してのことばの感覚能力も、或いは運動能力も、また音感などみずみずしく育つ情操感覚も、臨界期そのもので、人間の一生にとって、大切な時期なのです。

ご理解を深めて頂く為に『三つ児の魂』の神経物理学(田中繁著)から次の文章を引用しましょう。「幼児期という脳の発達の臨界期に、どのような経験を積むかということが、脳の発達にとって、とても重要になります。臨界期を過ぎた後で、どれだけ努力をしようとも取り返しのつかないような脳になってしまうという哀しい事態も有り得るのです。『三つ児の魂百まで』という諺は、つくづく脳の生後発達に於ける臨界期の存在を言い得て妙と云うしかありません。」 図 も大脳生理学の研究が「三つ子の魂百まで」という古い諺について科学的な根拠を与えてくれたのです。

第二. このように瑞々しく柔らかい脳だからこそ、外部からの刺激が偏ることなく、万遍に、全体的に、総合的に、バランスがとれていなければならないということです。

幼児期は脳の発達の臨界期と、脳の発達を促さなければとばかりに、所謂文字や…を与えて知育偏重的な活動を与える保育。否、子供は自然の中で育つとばかりに一日中園庭で放し飼いのペット宜しく

ざんまい
砂場などで遊びほけ三昧という“自由”放任保育。

バランスの取れた脳の発達を遂げる大切なこの時期から見ますと、どちらも極端な保育環境と言わなければなりません。子供は自然の子、豊かな自然の中に抱かれるように育つことも大切なことは言を待ちません。どの子も絵本が大好きで、自分の周囲にある文字や数字にも関心を示します。特にお母さんに抱っこして貰い年絵本などを読んでもらうのが大好きです。そして、2、3才頃にもなりますと自分で読みたい 4、5 才ともなると更には書きたいと言う興味が湧いてくる、これが子供の成長の自然です。「豊かな言語獲得は、豊かな心の形成」教室の中などで、ことば遊びなどの知的な遊びを集団で行い、経験することも大変重要な活動と言わなければなりません。バランスの取れた環境と経験を与えることが大切であると言わなければなりません。

脳の発達の原理から見ますと、ある種の偏った刺激が連続すると、部分的に『点』や『線』として大きく発達しますが、他の部分の機能の発達が阻害されます。逆に、バランスのある多様な刺激が万遍なく繰り返されると、脳細胞が幅広い『面』全体として相乗的に活性化され、豊かなバランスある成長が期待されるのです。それが『知・情・体』のバランスのある全人教育、即ち総合幼児教育という、私たちが標榜する教育理念の出発点なのです。体を動かす、見る、聞く、話す、心に感じる…。夫々の脳細胞の活動が集団の中でお互いに影響し合いつつ、子供達は成長します。

具体的には、体を動かすことがやる気、意欲、集中力などの頭の働きを促し、ことばを話し絵本を読む言語活動が、豊かな情感をも刺激します。日々の生活経験そのものが、そのまま幼児の成長発達ということになるのです。生涯に亘る人間性の根っこが、早くも完成しようとする時だからこそ、人間の基盤、土台の完成期として見つめていかなければなりません。日々の園生活に豊かに織り込む言語活動などの知的な営み、様々な運動、歌・合奏などの音楽活動、絵画・造形などの情操教育も、偏にこの時期でなくては育たない大切な子供達の豊かな心、その心が宿る逞しい脳の育ちを考えてのことです。ですから幼児教育は生活教育、つまり、いかに豊かな、又如何に適切で総合的な生活経験を与えられるかにかかっています。それが当なかよし保育園、保育活動の大眼目でもあります。

第三. 継続、繰り返しのより：毎日の反復・繰り返しのよりによって脳細胞間を配線する神経線維は太く遅く(随鞘化)すると共に、信号の伝達量も多く、早く、スムーズに伝達されるようになります。真似る模倣から本物へと定着し成長発達、発展して行きます。

毎日同じ時間に、同じことを、同じ場所で、同じ仲間と、同じ先生、同じ親が、同じように、同じリズムと、同じテンポで、心地よく楽しく繰り返す…。この原理に則っての営みは、幼児が生まれながらにもっている特有の欲求と、快いリズムや刺激とが合致するとき、情緒が安定し、興味や好奇心などの遊び感覚が助長され、意欲、やる気へと育っていくのです。さらに言語・運動・音楽リズム等も、感覚を通して体にしみ込み、習い性となってそれぞれの能力に育ち、定着して行きます。まさに『反復は力なり』です。

ヒトから「人」に育つとは

子供の“宝”を大切に ^{はぐくむ} 育む保育: 初めて子を持つ若いお母さん、赤ちゃんは、言葉もなく眠ることばかりなので、母親からの働きかけや世話などを感じていないのではと思ひ込み、一人にさせてしまう ^{あいかんぶつ} ことがあります。時には反対に、可愛いからという感情のままに、恰も人形などのような愛玩物にしてしまうこともあります。しかし赤ちゃんのリズムを乱すと、発達が歪んでしまいかねません。

赤ちゃんが人となる段階: 赤ちゃんを“人”となるべき第一歩で①う育てたら良いのでしょうか。それは、階段を一段一段踏みしめて登って行く、その最初の一段目をどう育てたら良いかとい②段階性を大切にすることです。この一段目で育てるべき順序を間違えると、成長のずっと後になって、特に思春期という誰もが驚えのある暴風雨がやって来、揺さ振られますと、それまで支えられて来た価値観とは違った局面に立たされ、それに耐え切れずに新たな問題となって表れたりするのです。

最初に、次の三つのことが、十分に満たされていないと、歪みや影響が出てくる可能性があるという大切な視点です。

- ① やすらぎと満足感でつつむこと。
- ② 赤ちゃんの生活リズムを大事にすること。
- ③ 赤ちゃんが安心して甘えられる母親・保育者であること。

親に対する甘えを、子供にとっての最初の要求の一つと見れば、その要求が充足したときの快い感情は、更にその要求を強め、それがエネルギーとなって次の意欲へと繋げてゆきます。キラキラした目と明るい表情、積極的に動き出そうとするパワーは、こうして育って行くのです。

子どもは、自らの力で歩き出す時期です。 子供にとって、それは、大人の想像を遥かに越えた感動であり、好奇心を刺激する新鮮な世界の出現だと思ひます。

- ① 安心して自分を出せるように、援助したり環境を作る。
- ② 子供が十分に探索行動を出来るように配慮する。
- ③ 癩癩や泣き叫びは、待つこと、見守ることで上手に受け止めましょう。

一才児はいつも世話をしてくれる人との間に“信頼感”を獲得させ、自分は愛されている、自分は守られている、自分はいつも受け止められていると言うことを自覚するようにならなければならないのです。母親や保護者から“信頼感”を得ている子供は安定します。子供は安定した時に自己発揮し、自己実現をスムーズにするのです。このような点で充足した子は探求心を燃やし、好奇心を湧かせて、探索行動を開始させるのです。

自分の足で立って歩けるようになり、手や足を自分で動かさ、自分で試す事が出来るようになった子供は、探求心と好奇心の塊 ^{かたまり} となり、色々な物に触れ、あちこちと動き回ります。そして、このように活発な行動を出現することが正常な発達を示している証拠でもあるのです。

一才半頃になった子供は、動き回るのが当然、じっとしていないのが健常。母親(保育者)はそれを根気よく受け止め子供に不安感を与えたり、不信感を与えたりはならないのです。一才半頃を中心として出現する探索行動を活発にする子供は、甘えを十分

に受け入れられ、安らぎと満足感を体験し、信頼感というより所を持っている子供なのです。保育のプロである保育者は、子供の発達の道筋をきちんと押さえて、その時期・時期に合った“今”を大切に保育、子育てを進めなければなりません。

子供は心が動かなければ、体も動かない: それでは子供はどんなときに意欲を持って取り組み、どんなときに自己を発揮し、自己を充実させているのでしょうか。

① 親や保育者から自分は肯定的に受け止められている、と自覚した時。

② その子供なりにやっていることが素早く認められ、親や保育者から共感・共鳴的な反応や言葉を得た時。

③ どんなにテンポが鈍くともその子なりのやり方で、その子なりにしていることをきちっと受け止め、支え、成し遂げた喜びを一緒に味わって貰えた時。

母親(保育者)と一緒にいるときの“快い” ^{こころよい} の経験が、保育者に対する安心感を成立させ、保育者にたいして色々な信号やサインを発するようになるのです。“保育者と一緒にいることが一番楽しく、最も安定する”と言う関係が、自己発揮へのエネルギーになって行くのです。

保育者との間に自由な会話が生まれ、要求がスムーズに出せるようになってきたら、色々な遊びの場に保育者と一緒に参加するようになるのです。そして、遊びの楽しさが自覚出来るように、保育者も子供と一緒に遊ぶことが心から楽しいという実感を態度や表情で表わすことが大切です。子供は心が動かなければ、体も動くようにならないのです。

子供は本来、したががり屋、やりたがり屋。子供は自由な創造力を持ち、それを再現したがるものです。私達は、子供の持っているこのような“宝物”を本当に大切にしながら育てなければなりません。子供は本来、ユニークであり、個性的であって、それぞれの持つ創造力をかき立てながら動いているものです。しかし、現在の子供を取り巻く環境は、子供が自ら自由に動ける場を狭めてきています。家に帰って遊ぶ場所(空間)もなければ、遊ぶ時間も、遊ぶ相手(仲間)、いわゆる三間がないのです。そして又、子供の玩具はスマートホン、メカロボットの代表されるようなテレビの映像を固定的になぞることだけで遊んでいるのです。

今こそ、子供本来の生き生きした: 新鮮な魂を呼び戻すべきときです。そして、ユニークで、個性的な想像力を生かすべき時です。日々の生活の中で、自由なイメージを共有し合う遊びを取り入れたいものです。一人一人の子供が持つイメージを出し合って遊ぶ楽しさを共感させたいものです。テレビのストーリーや登場するものをなぞるだけではなく、想像力を駆使して、もっと自由な、もっと広がった遊びを出現させたいものです。それは、子供の想像力を大切に受け止めているからです。自発性や創造性が伸ばされているからです。友達とイメージを交流し合って遊ぶことが実現出来ているからです。子供と保育者が楽しさを共有し合いながら、共感、共鳴し合っているからです。そこには子供の自由が保障されている場所(空間)があり、時間があり、仲間という所謂“三間”があるからです。

ことばは豊かな心を形成

誰も意識的に自分の子供に赤ちゃんの時から言葉を教えたりしたことはありません。しかし、どの子も日本語をしっかりと話すようになります。赤ちゃんが、知らず知らずのうちに、自然に言葉を覚えてしまうことに、何の不思議も感じないでいます。お母さんの愛が豊かな言葉と心を育てる。

そこには、言葉の獲得に止まらず、ことばによって心が発現するという、神秘ともいえる言語獲得の不可思議なメカニズムがあるのです。

0歳～3歳が、言葉の獲得形成にとって臨界期であるとされています。これは、前期の脳発達の臨海期とも一致します。生後一年もすると、赤ちゃんはことばを発します。それは、お母さんとの密着した生活のあらゆる営のみ中で、声・動き・表情・匂い・皮膚の感触などを通して、溢れる暖かい愛を感じつつ、お母さんの話すことばを含め、全てを環境として吸収してしまうからです。そして誰から教わったわけでもないのに、あるとき突然、日本語ということばを発するようになります。それは、教えるとか、覚えるとかの次元を超えた、生まれつきの感性であり、人間の乳幼児期にのみ与えられている五感を通しての感覚吸収という本能のなせる業です。身体が育つには母乳が必要であるように、乳児の心が育つには、情感・愛情溢るる言葉が必要です。言葉を発すると云うことは、それだけ心が発現しているということです。

「人間は、言葉によってのみ人間である。」言葉は、大脳新皮質と共に、人間にのみ授けられた天与のものです。ことばは単に人と人とのコミュニケーション

の手段に止まらず、言葉で考え、相手を思いやり、知識を習得し記憶するなど、こうした言葉の機能を思い合わせたとき、なかよし保育園の保育実践の中心に、豊かなことばの活動があることは当然です。言葉の豊かさは、人間性そのものの豊かさなのですから。

言葉の獲得は、人間の精神の宿る大脳の本能的な自己主張であると云われ、言葉は人間のみが持つ人間であるが故の特権、人間を人間であらしめる、最も大切な要件です。幼児期とは、神様が人類に与え給もうた…。[言葉を獲得するために特別に、聖別された準備期間]でもあります。

一方、幼児は、絵本、文字なども、同じ原理で習得していきます。幼児は、母親の膝の上でお話しを聞いたり、絵本を読んでもらったりするのが大好きです。そして、自分で絵本を読みたいという興味や好奇心が芽生え、本を読み始めます。そこから、4、5才にもなると更に書くこと、文字活動へと興味が広がっていく。もともと文字は、人間の話しことばを視覚的に記号化し、話しことばを再生する為に、記録したものに過ぎないからです。

二十一世紀は人・物・金・が国境を越えて交流する、国際化、自由化の時代です。自由化とは障壁を撤廃することですが、国際化の何よりの障壁は「ことば」です。しかし多くの日本人は、中学、高校、大学教養課程と、通算八年間も英語を学んでいるのに、自分の意思を英語で十分に疎通することができません。それを解決するには、英語は中学からという考えをやめ、英語は乳幼児からと、発想を転換しなければなりません。

生まれたばかりの乳幼児は意図的、意識的には教えなくとも一年位経ちますと喃語と云う形で日本語を発するようになってきます。それは言葉が持つメロデックなリズムと乳幼児が生まれながらに持つリズム感ある特有の言語感覚とが同調するとき言葉を獲得していくのです。

なかよし保育園では、ネイティブの英語教師による「楽しい英語」を、毎日（何事も毎日の繰り返し、積み重ねが脳発達の原理に則している）赤ちゃんから5歳児年長まで全クラスを対象に行っております。

本来乳幼児にとっては、英語も日本語と同じ「ことば」に過ぎません。英語と云えども例外ではなく、毎日の生活の中、英語という言語環境を豊かに与えることによって、日本語と同じように吸収していきます。言葉を獲得する臨界期なのです。従って英語、日本語の区別がない乳幼児期こそ、バイリンガル、マルチリンガルになれる最適期です。言葉を獲得する臨界期を過ぎようとする小学校になる頃にはそのような言葉を獲得する力は次第に減衰してしまっているのです。ところで、鉄は熱いうち（臨界期）に打てと云っても、幼児に英語を教えるとか、勉強をとか、覚えさせるとか、いわゆる知識を増やす

ことが先行し目的になると、それは詰め込みや押し付けの知的偏重教育になり、幼児にとって重荷になり、プレッシャーにすらなり兼ねません。飽くまでも、毎日の明るく楽しい雰囲気の中、子供の興味、好奇心、勢いを引きだしながら行う躍動感溢れる活動でなければなりません。それは、私たちが毎日楽しく行っている「日課活動」同様での英語版、日本語の代わりに英語でやる保育活動でもあります。つまり、

- ①リズムに乗ってテンポ良く。
- ②教える構えを持たず、子供と一緒に楽しむ。
- ③身近なものから周辺に広げる。
- ④歌を多用する。
- ⑤動詞のアクションなどには遊びの要素を取り入れる。

などの要素を満たしながら、日本語同様、乳幼児期の柔らかい言語感覚回路に自然に滲み込んでゆくように、日本語同様に豊かな言葉として育ていくことが大切です。

それは知識や技術として教える学校教育的な手法や考え方とは本質的に異ならなければなりません。楽しい集団活動に、興味や好奇心をもって主体的に参加し、外国語という英語への違和感なしに日常的に自然に馴染み、英語が大好きという雰囲気づくりの結果、年中、年長ともなりますと、日常生活に必要な簡単な単語、会話が自然に口を付いて出てくるようになるのです。英語と言えども、幼児の鋭い感覚で体全体で染み込むようにして獲得してしまいます。覚えたものは又体から沸き出てくるように自然に口をついて出てくる、それが自然の法則でもあるからです。

情緒を安定させることば・リズム・うごき

幼児が一日の大半の時間を過ごすところ、それが保育園。そこは、子供達が毎日の生活に心から、うちとけた「安心」を齎し、享受する天国でなければなりません。心が安んじるとは、深い情緒の安定であり、情緒の安定は子供達が生まれながらに持っている本性の欲求が深く満たされる時、こども自らがもつ心の状態といえましょう。子供は情緒が満たされた時、どの様な活動や環境もみな吸収し、それが生きる力となり、一人一人の子供達みんなが、自ら豊かに育ちゆくと言う幾序です。

それでは、子供が求め望んでいる本性的願望とは何でしょうか。人間の特性に根ざした生活の中に、言葉と動きとリズムが豊かに織り込まれている時、子供達の自ら育とうとする欲求が満たされ、情緒が安定します。

例えて見ますと、お母さんが赤ちゃんを世話する時、必ず赤ちゃんに言葉を掛けながらおっぱいを上げたり、おしめを換えたりします。それは、決して、言葉を教えようとか、意味を伝えようとかではなく、ただ赤ちゃんへの自分の思い、情感を伝えようとして、語りかけているのです。

勿論、赤ちゃんには言葉は分からないにしても、お母さんの言葉や表情を通して情感や思いを感じ取り伝えているのです。そのような事を通して、子どもの心を豊かにし、情緒が安定し、母子の信頼関係、絆が太くそして深くなっていきます。さらに、豊かな情緒として安定し定着していきますと、ことばを習得するための大きなベースとなっていきます。

子供がむずかる時、それをなだめようとしてお母さんは抱っこして子守唄を歌います。即ち、お母さんの胎内で聞いた血流や脈拍のリズムを感じながら、そして、歌にはリズムもことばも同時にあります。すると、赤ちゃんの情緒が安定し、泣いている子が泣き止む。更に、お母さんは赤ちゃんの体を揺すりながら、背中を優しく撫でたり、擦ったりと動きが加わると一層子供の情緒が安定して落ち着くようになっていきます。それは、ただただ母親となった時、母親の心に備えられた、子を慈しみ、愛する思いがことばとなり、動きになり、リズムにとまってお母さんのからだ全体から迸り、醸し出され、表情、うごき、情感あふれる言葉となって口から付いて出るのであります。これは言葉を教える、運動を教える、音楽を教えると言ったこととは全く別次元の、母親の純粹無垢、無償の愛の為させる業であります。

そのようにお母さんと協応同調するように、赤ちゃんは笑顔、表情、動作として、返ってきます。それが、母と子の絆と言う、人生で最も穏やかで

安んじた情感の漂うひと時となります。それは、母と子だけが判る特別で秘密の絆、見えない“へその緒”で繋がっているのです。幼児は母子のこのようなスイートでウオーム&ホットな繰り返しの日々の生活の中の営みを楽しみながら成長していくのです。この時、子供の本性が発現し、体も心も頭も、豊かな人格の基礎を自ら育んでくれる、濃密な母子相互作用となります。

このことから分かるように、ことばとリズムと動きと言う三つが一つ、三位一体となって営まれる生活、それこそ母と子の絆を深くし、子供の情緒を安定させ、赤ちゃんをして更に成長発達へと導いてゆきます。勿論、リズムも言葉も動きも、子供の成長にしたがって、より幅広く複雑なものとなっていきます。

子育てのその根幹の考え方は、子供が本性的に求める物を、子供達の生活の中に豊かに取り入れ、子供が自ら育つのを願いながら、祈り、待つと言うことは月齢の大小に拘わり無く変わることがありません。

父母の子供を思う情愛と同様、子供達の自ら育つと言うバイタリティーは、まさに、自然法爾に沸き出る神の理とも呼ぶべきものであるからです。

子供は、その本性として、皆、自らの発達を求めております。その表れとして、時には怒鳴る、騒ぐ、など一見粗暴のようにも見えますが、彼らは脳の爆発的な発達が為される臨界期といわれる、その時。それに対応するように、否、あの旺盛なエネルギーはそれに対応しているのに違いありません。従って、声を出したいが、どのように出してよいのか分からないので怒鳴る、動きたいがどの様に動いてよいのか分からないので騒ぐのです。

しかし、良い導きがあり、欲求を満たす環境が整う時、快感が生じ子供の機能快とも言うべき情緒を安定させ、次の活動へ向かう意欲へと育っていくのです。

なかよし保育園の体育ローテーションや日課活動は、本来、子供の欲求を満たし情緒を安定させることを願いとするものです。結果、運動感覚や言語感覚、更には知的感覚を磨く活動に他なりません。ことばと体を動かすことが一つとなって、それが、思いっきり自己を発現させる。それを知的な活動に繋げて行くこと、それがなかよし保育園の大きな主眼と言えるものです。

自らの本性を生き生きと発現する「あんしん」の生活とは、即ち、子供達のよい声、よい動き、よい表情に体现されるものでなければなりません。深い安心した日々の暮らしの営みの中、自らの生命を豊かに育む、それがなかよし保育園保育実践の核心なのであります。

子供をだめにする自由、子供が育つ自由

椅子に座って話を聞き、見、読み、書き、答える。みんなと一緒に考え、行動する。同じときに、同じことを、同じところで、同じなかまと、心を合わせ、クラス全員が一斉に行う。それが学級であり、学校です。ところが最近、ピカピカの1年生なのに、こんな社会性がまるでない子たちが目立ってきました。そうです。「学級崩壊」といわれる現象です。

昭和63年(1988年)、文部省の「幼稚園教育要領」の改定以来、「自由保育」と言う名の放任教育が、燎原の火の様に広がっていきました。

「一人一人の個性を尊重し」「自主性・主体性を育てる」として、終日園庭で遊ばせる。泥んこ遊び・砂場で遊ばせることによって、自然に、誰にも干渉されず、独力で、個性豊かに自主性・主体性が育っていくと。知育偏重早教育への反動もあり、「自由のびのび保育」の理念は瞬く間に広がってゆきました。

勿論子供が育つには、豊かな自然がありそのような中で自然と和み、融和し、親しむのは大切であっても、一日中それに浸ってばかりいることで本当に全人的な成長発達が期待できるのでしょうか。

第一にそのような条件を満たす“しぜん”は求めても「無いものねだり」、恰も、それを虹の中に見出そうと、求め続けているようなものです。

その理念やよし。問題は20数年経った今日、その実践結果や如何に……？

以下はベテラン小学教師が指摘する、最近の子たちの顕著な変化です。

- ・目と目を見詰め合って話すのが難しくなった。
- ・朝起きられず、朝食を抜く子や、給食に全く手を付けない子が1割近くいる。
- ・朝から頭やお腹が痛い、気分が悪いと訴える子がクラスに3~4人はいる。
- ・後片付けができず、忘れ物、落とし物もひじょうに多い。
- ・友達をつくり、お互いに交わり、協調してみんなで遊ぶことができない。
- ・嫌なことを我慢できず、直ぐにいら付いて机を蹴り、友達に手を出す。
- ・縄跳びができない。鉄棒に捕まってぶら下がるのが怖い。
- ・一見明るく可愛いが体力・気力がなく、デリケートで傷つき易いものが多い。

悲しいかな、こうした子ども達は、ダイヤモンドの様な「生きる力」の形成期にその機会を逸し、自

主性・主体性・ルール・社会性、もっと言えば「人間力」が育ち損なった「自由保育」の犠牲者達と言わなければなりません。彼らが小学校へと持ち上がるのですから、「学級崩壊」が起きるのは当然の帰結といわなければなりません。

最新の文部省の発表によると、昨年度の不登校児は激増し、過去最高の148,000人。中学では40人に1人、実にクラスに1人の割合になり、虐(いじめ)も深刻化しています。識者はこれを学校教育の荒廃としていますが、実はその根は幼児期の放任保育とも言える「自由保育」にあると言わなければなりません。

「三つ児の魂百まで」です。「三つ児の魂」に責任をもつ幼児教育者なら、現実を直視し、「過ちて改むるに憚る事勿れ」「自由保育」実践の信仰から脱却しなければなりません。このように豊かな「三つ子の魂」の形成に導くことのできなかった幼児教育者は、自らの行動を顧みることなく、学校教育の責任のみにして憚るならば、それは幼児教育者として責任放棄というものです。

真の主体性とは、自分の体で触れ、自分の目で見、自分の耳で聞き、自分の心で感じ、そして自分の頭で考えながら自分で判断し、自分の力で、更には、自分の責任において行動することです。責任のない自由は無いからです。それは放縦であり、自分勝手であり、無秩序になってしまい兼ねないからです。

自由や自主性の尊重は当然ですが、今の子どもたちに決定的に欠けているのは自制心。自分勝手な行動や我が儘放題が、個性や自主性と勘違いされてはなりません。

管理教育や知育偏重の早期押し付け教育が間違いであることは、言を待ちまんが、過去「お受験」がらみの早期教育は批判されても、自由放任教育への批判は皆無でした。

新しく改定された文部省の「幼稚園指導要領」は、意欲、心情、態度の三つが、「生きる力」として、バランス良く総合的に育つ環境を与えることを強調しています。

又、新しく改訂された「保育所保育指針」で強調されているのは「保育と教育は一体である」ということです。

ようやく文部科学省も、これまでの「自由保育」一辺倒の弊害に気付いたのでしょう

「三つ児のたましいよ」祝福あれ！

Q:今日は四歳のがが子がお世話になっている保育園の園長先生に、わが子の将来、小学校のことで、お聞きしたいとお手紙を差し上げました。ある教育月刊誌の記事の中で小学校現場の先生方の書かれている親にとって見過ごしの出来ない記事がありました。それは以下。

「日本中の多くの小学校で異変が起きている。小学一年生の授業が成立しないのだ。授業中、じっとして居られない、立ち歩く、教室の外へ出て行く、自分の思うようにならないと気がすまない、友達とうまく関れない…こうした子ども達が学級全体をかき乱すのである。これ等の子ども達はその特性から、親の躰や本人の性格が悪いと言われて育つ場合が多い。学校では毎日、毎時間のように厳しい注意や叱責を受ける。しかし、一向に改善されない場合が多いのである」。さらに続けて、「1年生を担任して、困ること。それは『作業指示が通らない』こと。『クレヨンで塗りましょう』という指示に、大抵の子供は『はい』と答え一斉に塗り始める。しかし、中には『色が塗れない』のではない。机の中からクレヨンを『取り出すこと』が出来ないのだ。同様に『算数の教科書の…ページを開きましょう』『ノートを出しましょう』といった指示も通用しない」と。

もしこれが「わが子であるなら、否、わが子もこのようになり得るのだ、と思うにつけ、子育てについて、改めて、考え込ませられました。幼児期の子育てと小学校の教育との関係について園長先生の率直なお考えをお聞かせ頂きたいのです。在園児母Sより。

A: Sさん、お手紙ありがとうございました。今の学校の状況を思うにつけ、親御さんにとって、ご尤もな心配だと思います。お答えする前に幼児期の脳の発達について少し学んでみましょう。

脳生理学者の沢口俊之先生は「**幼少期（臨界期）**での環境や教育は脳の**機能的側面**のみならず、**構造的側面**にさえ影響を及ぼします。教育というそれこそ言葉や音楽、或いは算数などを注目しがちであるが、前頭葉は言語や音楽のみならず、人間にとって非常に重要な働きの数々を担っています。例えば思考力や計画性、決断力、集中力、やる気、好奇心、更には「心の理論（相手の心を推察・理解する人間特有な脳力）」**等**など。同じ前頭葉が関係する以上、言語や音楽のみならず、こうした働きにおいても臨界期があつて、夫々の機能に関する脳領域の基本的な構造がこの時期において作られる」と。

つまり「三つ児の魂百までも」という日本の昔からの

ことわざ 諺が脳生理学の上からも科学的に正しいことが証明されてきたのです。それは、三つ児の時に「たましい」が育つように人間の脳は仕組まれており、やる気、好奇心、集中力であり更には我慢、頑張る、そして他人を思いやる心、謂ゆる「生きる力」であると。更に大事なこと、これらが育つのは0〜5歳までの2000日「三つ児のとき」、それが「臨界期（最重要期）」です。

これに対し、先に書かれておりました小学校一年生のお子さんの場合、お答えする為に申しますと、残念ながら最重要な幼児期の臨海期に、育つべき「たましい」やる気、好奇心、集中力、社会性、そして我慢し、頑張る力など「生きる力」が豊かに、そして十分に育つ時期を逸し、結果、集団生活の不適応なお子さんとも言わなければなりません。つまり、その起因は小学校ではなく、早や三つ児の時にあるというのです。

私共はこの厳粛な「三つ児の魂の秘密」、脳神経生理学の知見に基づく“脳の発達に則した保育”心を育てるを早くから園の保育方針、大きな柱として掲げて参りました。幼児教育を一言で云い表すと“三つ子の魂”に責任をいかに負うかに尽きると思うからです。

この時期に“たましい”が安定して育っている子は学校でも、先生の話①聞き、②理解し、③そして行動に移す、この三段階に添って何事もしっかりと物事が出来る子どもです。友達ともよく遊び、勉強大好き、運動大好き、友達大好き、学校大好きな子供です。

Sさん、お子さんは三つ子（二歳）の時から当園に在籍し、二年半、心身ともに逞しく育ってくれています。どうかお子様の「生きる力」を信じ、一緒に力を合わせ、希望をもって子育てを楽しんで参りましょう。二年後には学校生活をエンジョイするピッカピッカの一年生の姿が今から楽しみです。

「三つ児のときに」「三つ児のたましい」で満たされた、彼らは真、善、美、愛という真理、そのナビゲイターが導く道を見出すや、恰も蛹が蝶になったかのように、天高く、未来へと、己が道を真っ直ぐらに飛翔いきます。

私は、三つ児のたましいを信じます。三つ児のたましい達よ、大いなる未来に祝福あれ！と。

もう紙面も尽きてきました。大切なご質問に十分にお答えできず残念ですが機会がありましたら又、お答えいたしましょう。

(教育専門誌「家庭教育ツーウェイ」(明治図書出版)投稿原稿)

人生とは実に不思議、なかよし保育園との出会いも不思議、村上園長先生との出会いも不思議である。なかよし保育園の実践は凄い。本当に凄い。20年も前からこんな教育が実際に行われていたとは…。本気になって教育を探って30数年経つ小学校長の感想点描である。

1. 駅から5分、繁華街、ビルの3階。教育環境としては悪い。こんな悪条件のもとでどんな教育が行われているのだろうか。ふと心配になる。

「良い環境・良い先生・良い指導」の3条件が揃わないといい教育は行われぬ。そう一般的には思われている。実際多くの校長はそのために四苦八苦しているのである。この環境下でどんな先生方が、どのような養育をしているのか。単なる託児所か？保育室か？心配半分、期待半分それが初発の感想であった。2回目は自校の2名の教諭を連れて参観、そして3回目の今回は川口・ふじみ幼稚園の園長はじめ5名で参観した。関心は深まる。真剣である。

2. 朝の職員朝礼、全員正座・黙想、やおら立つと子ども達の出欠や日程の確認、更に健康・安全への配慮・指導の重点等が矢継ぎ早に進む、最後に園長の話。その間7分。公立の小学校では見られないスピード感である。仕事への「構え・ねらい・情熱」が朝の勝負である。「朝は金・昼は銀・午後は銅」朝が一番大事である。公立にはないスピード感がある。緊張感もある。子供への愛もある。

3. 屋上園庭での体育20分、これは凄い、本当に凄い。全員裸、裸になっての体育。たったの20分間であるが内容は濃密である。8本の長さ3尺ほどの上り棒、それに4本のロープ。年長さんは棒の方は簡単過ぎるのか、専ら揺ら揺ら動くロープにしがみ付きよじ登りながらロープ登りに挑戦している。棒・ロープ共にどの子もお猿さん宜しくすると登っていく。簡単のようだが難しい。握力・手足の筋力・腹筋、更に高いところを恐れないなど総合体力が必要。公立小だったら少なくとも2・3割悪くすると5割・6割が登り切れない。学級・学年間のバラツキも激しい。特にロープ登りは難しい。1割程度から8・9割が登り切れない場合さえある。4・5歳児跳び箱の「ヘッド跳び」、補助する先生の差し出す手を軸にからだの前転し宙に浮いた思う間もなく両手を上げピシット着地。10点満点のオリンピック選手さながら。跳び箱三歳児は4段の横とびである。年齢・能力に応じた高さである。手を挙げ走り回転し、終わってニコリ満足な表情。2回3回と挑戦する子もいる。鉄棒の逆上がりも簡単にクリア。くるくると何の抵抗もなく回る。

繋がった一連の運動体系。平均台のようなバランス・調整型の動き、子供の背丈ほどもある垂直板、そしてドラム缶を利用してのよじ登り・飛び降り、静と動の組み合わせも見事である。

ここには肥満児がいない。1人もいない。これは驚異である。しかし、この体育ローテーションを見れば納得である。当然であろう。小学校では普通でも平均でも1・2割、多い学級では3割を越す場合もある。肥満を生まない教育がここにはある。病人を生まない教育がある。恐らくこれから発生するであろうインフルエンザに罹る子も少ないであろう。罹っても早く回復するであろう。

4. ホールでの1・2歳児のリトミック。ぐるぐる走る・ぴよんぴよん飛ぶ・跳ねる・ジャンプする。スキップする。見よう見まねで覚えていく。見事である。泣きべそかいている子もいつの間にか輪の中に入る。まねをして学ぶ。理屈はない。説明でもない。独りで学んでゆく。いつの間にかできるようになっていく。ここがミソ。学校の先生は説明したが。教えたが。そんなことは何の役にも立たない。子供は動きながらまねしながら体で習得していく。それが子供の習性である。悪い先生ほど説教したが。3回も参観しているがここの先生が怒ったり説教したりしている姿を見たことがない。これも希有のことである。悪いことはストップをかける。良い方向に向かわせればよい。ただそれだけで良いのだ。

5. ホールでのリトミックの後は1・2歳児の体育ローテーション20分マットでの回転運動である「ローリング」、これは見たことがなく、初めて見るものである。先生の補助、勢いよく切れ味良く回転する。ボタン・ボタンとマットに叩き付けられる音がする。一見無茶な動きに見えるが子供は嬉しがっている。ここがミソ。切れ味が大事。この年代では頭の切れ味よりも体の切れ味である。特に幼児・児童期は多様な動きで育つ時期である。小学校でも低学年遅くとも中学年までである。一輪車・竹馬・木登り・鉄棒、更にサッカー・野球等体感覚はこの時期に覚えないと大人になってからでは難しい。

6. 朝礼は10分床に正座、背筋をピンと伸ばし真っ直ぐ前を見る。8・9割はOK、型の決まらない子も見られるが、ちょっと声をかけるだけ。なおす子はすぐ直す。無駄口はない。“黙想”の声で一斉にホールが静まりかえる。先生も背筋を伸ばしピシット黙想。師弟同行である。主の祈り・聖句暗唱・お話・クラシックなど公立では見られない朝礼風景である。ここでは、毎日続けられる。先生も子供も一つになって祈り・聴き・見えざる神に心を向ける。それがここにはある。「敬天愛人一西郷

南洲]「神を畏れることは知恵の始まり」である。宗派的活動は無益であり、時として有害であるが宗教的情操教育はこの三つ子の魂の時こそ重要である。

7. Enjoy-English 10分ネイティブの先生がネイティブで話しかける。弾丸を発射するように猛スピードで会話を進める。こちらが聞き取れないのに子供達はその子なりに聞き取っている。僅かに10分間、その継続である。子供の聴能力・音の識別力に感心する。子供の脳には言語を獲得・外国語ホルダーがあり、そのホルダーの感受性期は3・4才頃までである。音を聴く絶対音感も同じホルダーにあるのだろう。外国語の習得、特に英語教育はホットな課題である。なかよし保育園はここでも先駆的である。

8. 日課活動25分、知育の原型である。出欠の確認は漢字の氏名カードを使う。子どもは何の疑問も持たずにカードを見ながら次々と名前を呼んでゆく。かなりの漢字は識別しているようである。もう一度名前の確認。何人来ているかな。皆の数から休んだ数を引こう。28-5は23、23人だね。今日の出席は23人だね。さあ、はじめるよ。算数的活動から始まって、国語的活動から音楽的活動・詩や漢詩の暗唱・英語的活動へとカードが次から次へと繰り出される。ハイテンポ・メリハリの効いた指導展開・考え抜かれた教材の配列、オールラウンドな発達への目配せ。25分間にこれだけの内容を盛り込む公立小は日本中にあるまい。一連の繋がった良質な情報なら、濃密であればあるほど子どもは喜ぶ。私が懇意にしている巣鴨高校の地学・地理の授業が正にそうだった。本当に良い授業は、緩急自在な展開・静動の組み合わせが見事である。

9. 歌の発表20分これも驚きであった。ちゅうりつ組の歌「線路は続くどこまでも」「手のひらを太陽に」、メロデオン「メリーさんの羊」選曲も歌いっぷりも素晴らしかった。ばら・ゆり組の歌「紅葉」「旅愁」になるとこの年齢でよくここまで育てたものだと感嘆するばかりであった。メロデオンで「見上げてごらん夜の星を」は圧巻であった。音楽的知性が何時・どの様に拓いてくるのか興味は尽きない。(音楽のもつ)リズム・テンポ・ハーモニーが「情動」育成に深く関わっている。それを考えると「心教育」の中核に音楽があることを実感する。

10. もう一つ付け加えよう。それは「四股」である。日常の教育活動の中に「四股」を取り入れるなんて普通は考えつかないであろう。「相撲」が指導要領から消えて久しい。「体格はいいが体力がない」それが学校の現実

である。跳・投・走が全体的に落ちている。特に足・腰が弱い。これは致命的である。負んぶ・手押し車・登り棒なども効果的であるが四股こそ単純にして明快、効果的な方法であろう。境川部屋とも親しくしているが、親方は口うるさいぐらいに「四股」「鉄砲」「すり足」をやらせる。特に「四股」が大事だという。私も子どもと砂場でよく相撲を取るが年々子どもの足腰は弱ってきている。基礎体力をどう育てるかも学校の大きな課題である。

人生とは不思議なことである。揺るぎのない教育の筋道を求め求めて、やっと辿り着いたのが「脳科学の知見を生かした教育」であった。30数年も掛かった。「子どもの友になること」「生涯をかけて子どもの幸せに尽くすこと」これが出発点であった。代表宣誓した時の私の決意でもあった。教職を通して祖国に尽くしたかった。定年半年前になって始めて、揺るぎなき教育の実践知と脳科学の学問知の連携・融合の姿をみた。やっと見つけたという深い安堵・納得と大きな希望である。彷徨い方向を見失った日本の教育再生の第一歩がここなかよし保育園から踏み出されている。感無量である。

* 心(脳)を育てる食物・米・塩・水

食 現在、市販されている食材のどれを取っても農薬などの化学物質によって汚染されて、安心、安全、安定的に子供達に与えられるものは少なくなってきました。大人にとっては、大変便利な社会になりました。しかしその文明の利便さが、幼く未だ弱い乳幼児たちにとって育ち難い世の中になっています。身体の生命維持、成長に必要とされる食物、幼児のいのちが、遅しく、真っ当に、自然に育つことが、とても難しくなってきたと言う事です。環境汚染は、人間が生きること、そして幼児が育つことへの危険信号です。現代は、子供達を育てる食物について、我々は細心の注意を払わなければなりません。

私達は、そうした現実を直視して、幼い命を守って行かなければなりません。

当園が、給食の献立で留意していることは、新鮮で、その季節に採れた旬のもの、出来る限り、その土地 50k m 近辺で生産されたもの、ハウス栽培でなく、降り注ぐ太陽の光を受け、豊かな栄養とエネルギーを蓄えている露地栽培のものを与えるということです。自然に育った食品とは、化学肥料を与えて栽培したものではなく、天然自然の環境の中で自生し、結実したものを言います。まして農薬漬け、化学肥料漬けの野菜に生命力はなく、幼児の心を育て、身体に精気を与える食物とは言えません。

食物は、身体を育てることは言うに及ばず、一粒のお米が心を、身体の中の最大、かつ精巧精緻な臓器でもある脳を養い育てるのに大きく影響を与えるからです。特に乳幼児期は、身体よりも、外からは見る事が出来ない心(脳)が育つ食べ物を必要としているのです。今、幼児達の脳は爆発的に成長発達を遂げるために、豊饒で大量の栄養素(グリコーゲン)、そして清浄なる酸素を必要としているのです。0~1歳の赤ちゃんでは全血液の70~80%、大人でも35%の血液の栄養素を必要としているのです。このように脳は血液(栄養)の大食漢なのです。脳が育つ良質の血液を十便に供給してやらなければなりません。良質な血液は良質な食物によって生成されるのです。ですから、脳(心)が育つには、良質な食物を摂取することが必須で、毎

日摂取する食物は脳の発達にストレートに影響を及ぼします。近年、昔からの日本の伝統的食材の健康食、特に脳の成長に素晴らしい食材であることが世界の食料学者達に注目されるようになってきました。当園も基本的に伝統的な日本食財を素材として献立を致しております。

食事の献立については、毎月末出されます園の献立表を、是非ご参考にして頂きたいのです。メニューを作るときも、糖分を多く使用したもの、油で揚げたもの、動物性の脂肪や蛋白質を多く使用した料理などを、避けるようにしなければなりません。何れにしろ、現代グルメ風に手をかけ、人工的に加工した料理よりも、素材を生かしながら、さらりと単純に調理し、しかも食べ易い物を与えましょう。特に不足しがちな緑黄色の野菜、青魚、根菜類、海藻類、小魚、そして穀類など、海の幸、山の幸、野の幸と、バランスの取れた食生活にしたいものです。特に夏は、どうしても食欲が減退しがちです。食欲を増すために、しょうが、ワサビ、三つ葉、ねぎ、あしたば、モロヘイヤ、青じそ、冥加等を薬味にして、料理、みそ汁などに含ませるよう配慮すると良いでしょう。特に明日葉、モロヘイヤは、ミネラルが豊富で、腸を整えるのに有効です。根菜類として、大根、人参、蕪などに、おくら、青じそ、しょうが、みょうがを少々入れ、一夜漬け、または塩揉みにして、三時間ほどで食する…これは、夏の不足がちな野菜類の補給には大変すばらしく、風味を更に引き立ててくれます。

また、**オヤツ**ものべつまくなしに与えることなく、時間を決め、良質のものを適量に与えましょう。しかし、それも肝腎の昼食や、夜の食事に影響を与えない程度ということが鉄則です。

いのち溢れる米で「生きる力」を育もう。

何千年にも亘って主食として日本人の命を繋いできた米は、これまで日本の気候に適した、栽培し易く、そして多収獲で日本人の味覚に合うよう長年品種改良され今日に至ったものです。しかし、その主食である米の栽培方法は、現在大きく変化。省力化・機械化し、雑草や病気を防ぐ為に大量の農薬を散布し、そして化学肥料で育てる、と言う機械化、化学化、工業化という、工業製品でも生産するような生産形態になり、経済法則、効率主義、生産性優先の大きな波に押し寄せられた主食の米生産栽培方法が主流になっております。「命の基」であり、一粒の食物・食物は子供の心(脳)を育てると言う、食物の原点を置き去りにされているように思えてなりません。

旧い農家で生まれ育った私は、農薬漬けで、稲以外の昆虫や微生物など他の動植物などを殺し、更に石油を原料とする化学肥料を栄養源としている米が、いのち溢れる幼児達の生命力をまともに育てるとはどうしても思えないのです。

そうは言っても、当園ではそのような栽培の米しか入手出来ない場合、次善の策として、出来るだけ農薬も少なく、牛、鶏などの有機肥料で栽培された物を選んで購入して参りました。それでも、胸の内では何とか昔のような全く自然無農薬の農法のお米は無いものかと、この20年間まるで宝探しのような思いで探して参りました。ところが、その宝に漸して出会うことができた！私は先日、友人の紹介で岩手県江刺市の伊藤茂様という篤農家に伺い、この目でしっかりと見学することが出来ました。伊藤様は、私が理想として思い描いてきた農法以上の篤農家でした。

以下、少し詳しくその「伊藤農園探訪記」を書いてみましょう。伊藤様をご紹介下さったのは、当園にも講演会に講師としてご出講下さいました、元浦安市教育長の村井由敬先生です。実は先生は15年前より江刺市と松戸市に住み、江刺では無農薬・無化学肥料農業も営んでいらっしゃるのです。

伊藤農園の田圃にお伺いして先ず驚きましたのは、田圃の畦道の草むらに差し掛かったその瞬間です。何か動いたかと思うと一斉に飛び出した何十匹もの小動物が私達を歓迎してくれたのです。畦道の草叢は昆虫達の住む楽園だったのです。丁度、私たちが通りかかった午前中は昆虫たちの睡眠時間だったのかもしれませんが。それは畦道だけではありませんでした。稲が植えられている田圃の中でも同じような現象が見られたのです。私達が通るや田圃の中の水面が何十本もの筋となり俄然動き出したのです。

現在、農薬や除草剤を使う一般(慣行農業)では見られないメダカや蛙、ミズズミ、げじげじ、ミズスマシ等等。更に驚いたことに清浄な環境・水だけにしか棲むことのない「山椒魚」もいるそうです。それら小動物を餌としている蛇類も棲んでいると言うのです。丁度少し、離れたところから十数羽の野生鴨の群れが私達に驚いて田圃から飛び立っていきました。畦道の昆虫達、田圃の水中の小動物、鴨の皆さんが折角彼らの楽園の棲家で生活を楽しんでいるのを、お邪魔してしまつたようで申し訳ない気持ちでその場を後にしました。

又、伊藤さんの稲はととても青々として精気が漲っており、稲穂の長さや粒数の多さ、そして粒の大きさも見た目でもはっきりと分かります。それに対し、一般の他の田圃は茎も細く背丈も小さく、葉の色も黄色味になりかかっており稲の穂も短く垂れているのです。ご案内の伊藤さんに、お隣の田圃は種類の違う稲ではないのかと、確かめましたところ、全く同じ「ササニシキ」であるとのこと、これ

には又驚かされました。そしてご同行の村井先生曰く「こちらの稲たちは生きることを喜んで“歓喜”しているのに、一般の稲は農薬や化学肥料や水抜きで苦痛の“悲鳴”を上げている」と。全く当を得たことをおっしゃるんだなあ、と納得させられました。更に籾の粒数をお聞きしましたところ、慣行栽培の稲穂は80粒から100粒であるのに対して、伊藤さんの稲穂は120粒から180粒にもなるとのことでした。

その長く垂れ下がった穂を支える茎丈も太く逞しい。

それでは、無農薬、無化学肥料、無肥料、不耕起でどのようにしてこの「自然栽培」稲作は成り立っているのでしょうか。それは先ず、秋に始まります。刈り取った稲藁は決して焼いたり捨てたりせず、田圃の中に返す為そのまま置きさります。その田んぼに、水を満々と湛え、春までそのままにするのです。江刺市は冬でも雪はあまり降りませんから、東北にしては結構晴天の日が多く、太陽の光熱で微生物が増え続け、先述の昆虫や小動物等も棲みつき冬を越すのです。冬場にもそれら小動物を餌にする為に鴨やその他の渡り鳥などの餌場にもなり、それらの鳥類が落とす糞等もよい肥料となります。春先なると、地中から目覚めた蛇や蛙なども棲みつくのです。

冬を越した膨大な微生物と小動物は春到来と共に新しい生命へと誕生し生まれていきます。その死骸等も有機物として稲の肥料となっていきます。普通の慣行農法の田圃は耕運機で耕し(耕起)、水を引き代掻きをして平らにし、そして苗を植付(田植)けます。しかし、伊藤農法は違います。先述のように、水を満々と堪えた田圃は豊饒な有機栄養分が含まれており土は柔らかく耕す必要は全くなく(不耕起)、そのまま苗を植えつけることが出来るのです。6月、田植えです。慣行農業では5~7本植えですが、こちらでは1~2本植えで、苗の間隔も普通よりも広く植えつけるのです。こうして植えつけられた、苗はぐんぐん大きく、本数も27~28本にも分岐していきます。驚いたことに除草剤など一切撒かない(無農薬)のに粟や稗等の雑草も殆ど生えていないのです。勿論イモチ病などの病気とは無縁の健康体です。また、この田圃では、朝夕になると白い糸状の物に稲穂一面が覆われるので、お聞きしますと、蜘蛛たちの夕食時間とのこと。夕刻になり飛び立つ小昆虫類を捕獲する為の蜘蛛の巣であったのです。勿論虫もいるそうです。何と脈々とした豊かないのち溢れる生態系の世界なのだろうか。太古の昔から脈々と続いている大自然の生態系の世界を見る見事な生命の循環の輪が出来上がっているのです。正にいのちを育む主食・お米を育てる田、圃場に相応しいと言わなければなりません。

この稲達はもう二ヶ月ほどで刈り取られます。普通は脱穀した籾は乾燥機の熱風で強制乾燥されるのですが、伊藤農法では昔ながらの方法で、一ヶ月近く、太陽の天日乾燥をしてから、脱穀し、藁は来年の為に田圃にお返しし、そして籾実だけを戴くというわけです。

愛おしい我が子にでも触るかのように稲穂を手にお話をされる伊藤さん、そこには、今回お初にお目に掛たのにも拘わらず、もう何十年来の知己のように気持ちが相通じ合うものがあり、この11月からは、このいのち溢れるお米で、子ども達の“いのち”を育むことが出来る幸いを思い乍ら伊藤農園を後に、漸くにして、20年来求めてきた宝にお会い出来た、爽やかな気持ちで帰路に付くことが出来たのです。

伊藤さんは籾米のまま保管し、出荷直前に脱穀精米して生きているお米を当園の園児に直送して下さるとのことです。

・ミネラルいっぱいの食塩を与えよう。

塩 幼児に与える食物に、精製塩を使うことは避けたいものです。精製塩は塩化ナトリウム 99.7%で、食料品というより化学製品です。そのような塩を原料にして作られた味噌・醤油などの調味料を摂っていると、血圧を高め、心臓病や脳溢血などの原因になり兼ねません。そこで、当園は2年ほど前に沖縄で開発された常温瞬間結晶製塩法で作られている世界一微量ミネラルの多い成分の塩を購入することができました。この製造法だけが実現できる究極の健康によく美味しい塩です。この塩の特徴として

- 世界初の常温瞬間空中結晶製塩法（2003年中小企業庁長官奨励賞受賞）による100%沖縄の海水のみを原料にした、雪のようなさらさらの自然海塩です。
- 海水を細かい霧にすることにより水分だけが気化し、ミネラルは瞬間的に結晶化するため、これまでの製塩では含ませることの出来なかった微量ミネラル・極微量ミネラルを豊富にバランスよく含み、塩分も73.3%と一般的な食塩より26%低くなっています。
- 「ぬちマース」に含まれるミネラルはイオン化し易い為、体内への吸収率がよく、現代人に不足しがちなミネラルを毎日の食生活で手軽に摂取することができます。
- 「ぬちマース」は味にも拘り、じっくりと手間をかけ苦味を抑え、まろやかにしています。その独特な風味は、塩辛さだけでなく、苦味、酸味、旨みのバランスが絶妙で沖縄サミットでも使用されたほどの味の良さです。又多くの料理人や老舗の料亭などからも絶賛されています。九州大学大学院の味覚センサーの美味しさの研究で日本の代表的な12種類の塩の中で最も美味しいと評価されました。

*ミネラル含有量世界一の海の結晶

全ての生命の源である海。そこには生物に必要な全てのミネラル成分が豊富に含まれ、人間の血液や体液、そして赤ちゃんが育つ羊水とほぼ同じバランスで存在しています。この自然の恵みの海水を海のままの状態で結晶化させたものが「ぬちマース」です。これまでの製塩法では含ませることのできなかつた微量、極微量ミネラルまで豊富にバランスよく含有し、世界で最も多くミネラ

ルを含む塩としてギネスブックにも認定。（2000年2月）

健康維持に欠かせないミネラルが多い分、塩分は格段に低く、健康的な食生活が目指せます。「ぬちマース」は単に味付けだけの塩ではなく人間の細胞にとって理想のミネラル供給塩です。沖縄の方言で命のことを「ぬち」、塩を「マース」と言います。生命が誕生してから36億年間、海の中で進化してきた生命にとって一番大切なものは海のミネラルバランスです。それをそのまま結晶したことから「命の塩」という意味の「ぬちマース」と名付けられました。

・ぬちマースの製造法

「ぬちマース」は世界初の「瞬間空中結晶製塩法」と言う特許製法で作られており、従来の製塩法では含ませることの出来なかつた貴重な微量ミネラル、極微量ミネラルを含ませる事に成功しました。「瞬間空中結晶製塩法」とは、室内で細かい霧にした海水を噴霧し、温風を当てることで、水分だけを気化させ、海水に含まれるミネラル成分を瞬間的に全て結晶化する製法です。これまでの煮釜式やイオン交換膜法ではミネラル成分を結晶化させることは不可能で、にがりとなって塩には含まれません。「瞬間空中結晶製塩法」から生み出された「ぬちマース」は健康維持に欠かせないミネラルを豊富にバランスよく含む自然海塩です。ぬちマースの原料となる海水は、沖縄県浜比嘉島から取水しております。浜比嘉島は神々が住む島といわれ、沖縄本島から海中道路でつながっております。農業や生活排水、工業排水等の汚染の無い、流れの速い太平洋側から取水しており、海水を厳選しております。

JT等の専売塩は、イオン交換膜で+イオンと-イオンを分離濃縮し、真空釜で結晶化する製法で、その後水分を遠心分離機で除去する為、塩分の純度が高く(99.4%)なっています。

又、ぬちマースの瞬間空中結晶製塩法は、2003年10月に中小企業庁長官受賞しました。この賞が特許庁長官賞、文部科学大臣賞と並ぶ発明における最高賞の一つでこれまでの製塩法では現実することの出来なかつた貴重なミネラル成分を含ませる事に成功した技術として高い評価を受けました。

製造法比較表

区 分	製造法	原 料	手 順	NaCl%
海 塩	瞬間空中結晶法	海 水	海水を霧にする国際特許法により、水分は気化し、ミネラルが海のバランスのまま結晶化する。(瞬間空中結晶法)	73.3
海 塩	煮 釜 式	海 水	海水を循環・濃縮し、平釜で加熱結晶し、脱水機で食塩結晶を採取。	85.9
岩 塩	掘 採	岩 塩	地殻変動によって作りだされた巨大な岩塩層のNaCl結晶を掘削・採取	95
人工再生塩	煮釜式	輸入天日塩	外国産の天日塩を海水や、地下水などで溶解し加熱・結晶	95.3
JTの食塩	イオン交換膜	日本の海水	「イオン交換膜法」で海水をNaイオンClイオンに分け濃い塩水を作り真空式蒸発装置で結晶化。	99.4
	煮 釜	輸入天日塩	外国産の天日塩田で2・3年かけて結晶させた高純度塩を洗浄・粉碎食塩	98.1
	煮 釜	輸入天日塩	外国産天日塩を水に溶かし、加熱・再生した食塩	99.7
天 日 塩	天 日 干 し	海 水	塩田に海水を引き込み天日にて水分を蒸発させる。結晶を集め、さらに自然乾燥させる。	97.5

・水の浄化装置それは「体外の人口腎臓」



炭酸飲料、スポーツドリンク、無果汁の缶入りジュースや水道水はだめ、100%ジュースは程ほどにと、それでは、何を、どのようにして水分補給をすればよいのですか、とよく聞かれます。

埼玉県の西部地区に位置するふじみ野市、なかよし保育園の水道水は浦和市と、富士見市の間を流れる荒川の久保広域水道ダムから取水され、久保浄水場から供給されています。私達が毎日飲んでいる水道水は、上流の川上から供給される清浄できれいな水と思いがちですが、実は川下、あの荒川の下流からです。この事実はあまり知られておらず、事の重大性を考える機会もありません。しかし、これは私達が垂れ流した糞尿、その他の汚水、生活水が飲み水となって私達のもとに再び還流してくるということを意味します。

勿論、今は汚水処理場で 20PPM 以下に浄化しなければ下水道に流せないように規制されております。多少の活性炭等も使用しているとはいえ、浄水場での殺菌の主役は、何とんでも大量の塩素です。それは、法定伝染病、即ちチフス、コレラ、赤痢等の病原菌を根絶することが目的です。法律が命じているのはそこまで、つまり伝染病の殺菌に限られています。「味が良く、健康を促す清涼な水を供給すべし。」等とは一言もないのです。煮沸すれば身体に有害なものは取り除くことが出来るように思われていますが、煮沸によって細菌類は死滅しても、無機の農薬や重金属類は残留します。水道局は、あくまでも法律で定められた最低限度の処理をした水を供給しているに過ぎないのです。しかし、ゴルフ場や水田取水源には、500 以上もの化学汚染物質が含まれていると云われており、それを浄化しても、200 種類以上は残ると云われております。然もこの化学物質は、いくら大量の塩素を投入しても除去することは出来ません。有機物や殺菌ではないからです。それどころか、塩素と原水中の有機物であるフミン質とが反応すると、今深刻な問題となっている有機塩素化合物、トリハロメタンが生成されます。1986 年の調査では、1.5%の水道水で、30PPM を越えるトリハロメタンが検出されたという報告もあります。1990 年以来、日本人の死因のトップはガンです。年間 20 万人以上の人が、ガンで死んでおり、年々その数が増えています。特にトリハロメタンの測定値が高い大都市圏で、ガンの死亡率が多いことから、両者に深い因果関係があるということが定説になっています。トリハロメタンは、フミン質という有機物と塩素との結合によって生じますが、有機物による水質汚染が進んでいる現況では、益々不安が拡大して行くことでしょう。確かに、これら水道水に含まれる有害物質が、今すぐ健康に影響を及ぼすと言うわけではないかも知れませんが…。

・たかが水、されど水

乳幼児の身体は、80%が水分です。水の中に『いのち』が浮いている、と云ってもよいのです。まさに、水こそ赤ちゃんの命の源であり、胎外の羊水ともいえるもので

す。そのいのちを養う大切な水を、生まれたばかりの新生児に、荒川の水で研いでミルクを与えることを考えるとき、これから育つ命を抹殺するにも等しいことをしている事に、唯気が付かないだけなのです。飲料用、調理用として、毎日幼児たちに取り入れていることを考えると、空恐ろしい気持ちに、「知らぬが仏」で済まされることではありません。このような人工の害毒、汚染から幼い命を守り、内に秘められている旺盛な生命力、生れ乍らに持っている幼児の命の力を、健やかに育ぐくまなくてはなりません。それには、いのちの源である『水』が何よりも肝腎であるということです。ご家庭でも身体に有害を及ぼすものは、『体外の人工腎臓』とも言うべき強力な浄化装置を整備し、100%心配のない水を供するようにしたいものです。

私達はこの問題に取り組んで、研究、実証を重ね 25 年前には、決定版と言えるものがなく、悩んでおりました。そこで目を海外に向け、当時、浄水装置においては、アメリカが日本より数段進んでおり、特に NASA (アメリカ航空宇宙局) は、1950 年頃から、膨大な国家予算と人材を投入して、宇宙船やスペースシャトルでの飲用水の浄化の研究を重ねてきたという実績があり、その貴重な技術的研究成果は、飲用に耐える水の浄化の分野にも威力を発揮しています。そこで、アメリカ製の業務用逆浸透浄水装置を導入しました。浄水場を通り抜けてしまうマイクロの汚染物質を除去するには、信頼性のある精度の高い高度なフィルター処理が不可欠です。これは五段階の筒状浄化フィルターで構成されており、最終的には 0.005 ミクロン(髪の毛の 75 万分の 1)、正に分子のレベルまで、殆ど全ての毒性汚染を濾過し除去してしまう高度な性能をもっています。塩素はもとより、カルキ、トリハロメタン、ハitek 汚染のトリクロロエチレン、ゴルフ場の除草剤等の農薬、勿論有害なバクテリア、雑菌等、全てを除去します。一方この浄化水は、単に毒性汚染を取り除くことに止まりません。500 万分の 1 ミリの浸透膜を通過した水の分子集団(クラスター)は人間の細胞膜に浸透する体液と同じく六分子から七分子という通常の 3 分の 1 以下の小集団に変わり、細胞膜に浸透しやすい媒体液として働き特に食物の消化吸収を助け、胃腸など消化器系統の働きを整え便通、排尿をも促進します。その結果、アトピー、食欲不振、胃腸障害、高血圧、肥満等にも有効です。ホーム・ケア・セラピーと云われるほど良い水に変え、家庭で料理、飲用に用いることで、体内の全ての老廃物を駆逐して体細胞を賦活させ、体質を大きく改善。味もとてもまろやかで、大地の奥底まで浸み込んで這い、何百年という歳月を経て地表に湧出した名水の清水と比肩出来る、正になかよし保育園版清水です。此の新鋭の浄水装置のお陰で、私達も園児達に安心して水分補給が出来、冷たい杜仲茶・玄米茶そしてウーロン茶を作り、思いっきり与えることが出来、夏の水分補給して酷暑から健康を守ることに大きく貢献しております。

☆☆天国の特別の子ども☆☆

天国がひらかれました。
地球から、はるか遠くで。

「次の赤ちゃん誕生ですよ」と、
天においでになる神さまに向かって、天使たちが言いました。

この子は、特別の赤ちゃんで、たくさんの愛情が必要でしょう。
この子の成長は、とてもゆっくり見えるかも知れません。

もしかして、
一人前になれないかも知れません。
だから、
この子は、下界であう人々に、
特に気を付けてもらわなければならないのです。
もしかして、
この子の言うことは、なかなかわかってもらえないかも知れません。
何をやっても、うまく行かないかも知れません。
ですから
私たちは、この子がどこに生まれるのか、注意深く選ばなければ
ならないのです。

この子の生涯が
幸せなものとなるように、
どうぞ神さま、
この子のために、すばらしい両親を探してあげてください。
神さまのために
特別の任務を引き受けてくれるような両親を！
その二人は、
すぐには気が付かないかも知れません。
彼ら二人が、自分たちのために求められている特別の役割を。

けれども、
天から授けられたこの子によって、益々強い信仰と豊かな愛を
ひらくようになるでしょう。
やがて二人は、
自分たちに与えられた特別の神のおぼしめしを悟るよう
になるでしょう。

神から授けられた、
この子を育てることによって、柔和で穏やかな、
この尊い授かりものこそ、天から授かった特別の子どもであることを。

子供の笑顔を大切に育てたいから

上福岡駅から3分、商店街の真ん中
一見、保育園らしくないビルの3階
でも一歩中に入ると、そこは
総檜そうひのみの香り漂う森の中の教室を思わせます
檜木材フローリングの床の中には
備長炭を粉にした活性炭を敷き詰め
教室内はマイナスイオンでいっぱい満たされた
森林浴の環境を実現しています

◎

専門の栄養士が
安全な食材と水を吟味し
環境ホルモンやダイオキシンからいのちを守るために
アトピー子の園児にも配慮した
伝統的な無添加手作りの自然和食

◎

産休明けから小学校就学まで
人生の基礎工事がすべて完成するこの時期に
充実した責任のある保育のために
保育者は全員
プロの保育者としてよく教育された、有資格の正規職員です
パートなど臨時の職員はいません

◎

ご両親の子育てニーズのお役に立つのも
なかよし保育園の大切な役割
保育は朝7時から夕方7時までと長時間保育を実現
お忙しいご両親のスケジュールを配慮しつつ
子供の育つ時刻表として
四季折々の多彩な行事を設定しています。

お問い合わせは

☎ 049-266-6662 6が5つで語呂がよい

<http://www.hoikuen-kids.com>

ご両親のご期待に全身全霊で応える保育センター

な **か** **よ** **し** **保育園**

〒356-0004 ふじみ野上福岡 1-12-8(上福岡駅北口歩3分)

なかよし保育園案内

保育年齢対象:0才産休明け～小学校入学まで

長時間保育:朝7時～午後6時、(月～土曜日)延長保育:午後6時～7時まで。

通常保育時間:8:30～16:30.早朝保育:7:00～8:30.延長保育16:30～18:00.有料延長保育料:18:00～18:30まで300円(30分単位)。18:30～19:00まで10分150円(10分単位)。

完全給食 栄養士による幼児のための育脳自然健康食です

総合幼児教育研究会会員園。(財)幼児開発協会(EDA)推進協力園.日本保育学会会員。

保 育 時 間

保 育 時 間	月～金(土曜は18:00まで)	07:00時～19:00時
通常保育	月～土	08:30～16:30
早朝保育	月～土	07:00～08:30
延長保育	月～土	16:30～18:00
延長保育(有料)	月～金	18:00～19:00
備考:土曜保育は二日前(木曜日)の朝までに申込書で申し込みください。		



すべては「三つ児の魂」を育むために

- ・ 駅から3分、商店街の真ん中、一見、保育園らしくないビルの3階、でも一歩中に入るとそこは、総檜(ひのき)の香り漂う森の中の教室を思わせます。

檜木材フローリングの床の中には備長炭を粉にした活性炭を敷き詰め、教室内はマイナスイオンいっぱい森林浴の環境を実現しています。

専門の栄養士が、安全な食材と水を吟味し環境ホルモンやダイオキシンからいのちを守るために、アトピっ子の園児にも配慮した伝統的な無添加手作りの自然和食。

産休明けから小学校就学まで、人生の基礎工事がすべて完成するこの時期に、充実した責任のある保育をするために保育者は全員、プロの保育者としてよく教育された、有資格の正規職員です。パートなど臨時の職員はいません。

ご両親の子育てニーズのお役に立つのも、なかよし保育園の大切な役割、保育は朝7時から夕方7時までと長時間保育を実現、お忙しいご両親のスケジュールを配慮しつつ子供の育イ暦として、四季折々の多彩な行事を設定しています。

子どもらよ
このにわにきて
あそべ
うたえ
花のように
鳥のように



入園案内手引き書

〒356-0004 埼玉県ふじみ野市上福岡 1-12-8

発行：社会福祉法人ふじみ野なかよし保育園園長
教育学博士 村上光男

TEL：049-266-6662 Fax：266-2221

E-mail: nakayoshi@hoikuen-kids.com

Homepage: <http://www.hoikuen-kids.com>

発行日：2015年4月

社会福祉法人
ふじみ野

なかよし保育園